
ぼくらのエヴァンゲリオン

ガバパピッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらのエヴァンゲリオン

【Nコード】

N0261I

【作者名】

ガバパビッチ

【あらすじ】

西暦2015年、父親に呼び出されエヴァンゲリオンに乗ることになった碓シンジ。その任務は使徒と呼称される敵を殲滅すること。彼は自身の友人や大切な人を守るために、そして自分を捨てた親を見返すために彼は使徒と戦う。事になるはずだった。それと平行して進んでいくもう一つの物語。それは関わることの避けられない事象だった。2つの物語が重なり、シンジの運命が、みんなの運命が、世界の運命が大きく動く…。かなりシリアス&ちよつとラブコメなエヴァ×ぼくらのです。

第1話・動き出した、物語〈origin〉

>O::prologue Eva side<

「知らない天井だ…」
それは悪夢から回帰した彼の第一声だった。

彼の名前は碓シンジ。

先日、突然シンジの実の父親である碓ゲンドウに呼び出され、『エヴァンゲリオン』という得体の知れないものに乗って、『使徒』と呼称されるものと戦えと命じられた。

それからシンジはエヴァンゲリオンに乗り込み

…という所でシンジの記憶は途切れる。

思い出す必要も無かったため、シンジはもう一度眠りに就く。
桜咲く春、暖かく柔かい季節だった。

■■■■

ピンポーン

「シンジ学校行くわよ、早くしなさいよー」

この声の持ち主はシンジの幼なじみの惣流・アスカ・ラングレーで

ある。

彼女は一人暮らしのシンジに毎朝世話を焼いて毎朝家に迎えに来てくれるのだが…

「ちょっとバカシンジ早くしなさいよ！
わたしまで学校遅れちゃうじゃない！」

「じゃあアスカは先に行けばいいのに…
いちいちおせっかいなんだか…」

「誰がおせっかいですってえ〜？」

アスカがシンジの胸ぐらを掴む。

「わかった…く、ぐるじい…」

シンジはアスカの腕をタップするが、アスカはその手を緩めない。

「あなたは毎朝このアスカ様に起こしてもらっていて何か不満があるってえの？」

アスカは手を離す。

「ありません…」

「ならよろしい。」

さっさと学校行くわよ。」

…とまあ、権力の差は明確である。

シンジは幼少の頃母を亡くし、父はその事を境にいなくなってしまうた。

シンジは一人になってしまい、自殺すら考えたという。

そんな時に傍にいてくれたのがアスカである。

当の本人はそんな重苦しい事情など知らずに接触してきたらしいが、命の恩人であることには変わりはない。

だからシンジはアスカに頭が上がらないのである。

そんな事を回想しつつ、アスカの方を向いて微笑むシンジ。

バシッ、

「何よ気持ち悪い！」

叩かれてしまった…

学校に到着したアスカとシンジ。

見慣れた校舎に見慣れた先生、見慣れた友達がいるだけで、何の変わりもない。

ただひとりを除いて…

「おはよう、碓君。」

「おはよう。」

彼女の名前は綾波レイ。

1ヶ月前に転校してきた謎多き子だ。

感情を表に出すことが少なく、笑った所を見るなんてのは包帯を巻いて学校に出てきた日にちよりも少ないのではないかと思うくらいである。

それでもいくぶんかボクは他の人よりは話しかけやすいみたいだ。多分席がとなりだからだろう。

「ゴールデンウィークの臨海学校はどうだった？
ええと、どっかの島だったっけ？」

「ええ、そうよ、たのしかったわ。」

綾波が表情を緩める。

「そう…なら良かった」

「碓くんたちこそ大丈夫だったの？」

「え…な、何が？」

まだ質問を受けてないにも関わらず、声が上がするシンジ。

「第三新東京市で謎の爆発事故があったって、」

どうやらボクと使徒とのドンパチは爆発事故として済まされたよう
だ。

まあ、得体も知れない怪獣とガ○ダムのようなロボットが闘って街
を破壊していきまして、なんて言ってもこれっぽっちの信憑性も無
いからな…

「大丈夫、だったよ。」

「良かった。」

「おはようさん、センス。」

「おはよう、碇。」

こいつらは鈴原トウジと相田ケンスケ、シンジの親友そして3バカ
トリオの構成員でもある。

勉強に頭が働かない代わりに、イタズラなどのどーでもイイ事には
そんじょそこらの秀才クンも適わないほどの能力を発揮する。

周りからすれば迷惑極まりない連中なのだろう…

「何やセンス、もみじが出来とるやんけ？」

「まあ、ちよつとね…」

シンジが苦笑いを浮かべながら犯人の方向を見る。

「こっちからすればうらやましい限りだよ、碇。」

「そんな事ないって…。」

「ま、これも幼なじみの特権みたいなモンやからな。」

トウジがそんな事を皮肉めいて言う。

それはいつもの他愛もない、どこにでもある一場面だった。

しかしこの時はシンジは知る由もなかった。

これから次々と起こる不思議な出来事を…

ピンポンパンポーン

学校のチャイムの軽快かつ耳に響く音が生徒を振り向かせる。

『えー…』

2年A組の碇シンジ、至急職員室へ来なさい。

繰り返す、、、碇シンジ、至急職員室へ。』

第2話：もう一つの、物語〜game〜

中学生になった。

もう僕達は一人で何でも出来ると思っていた。

そして僕達は出会った。

圧倒的な力と、圧倒的な無力感と、圧倒的な絶望に…。

ワクこと、和久隆。

カンジこと、吉川寛治

チズこと、本田千鶴

モジこと、門司邦彦

マコこと、半井摩子

キリエこと、切江洋介

ウシロこと、宇白順

カナこと、宇白可奈

レイこと、綾波レイ。

これは9人の子供達の紡ぎだす物語、そして…



「ったくよお…」

どうしてこんなところまで来て宿題しなきゃいけないんだよ…」

ワクが溜息まじりに、誰に向けるのでもなく不平をぶちまける。

「期日までに出さないで放っておく人がいるからでしょ。」

マコが呆れ顔でワクに言葉を返す。

「オレ、別に期限守ってるし、なあ、モジ？」

ワクがモジの宿題を覗き見ようとしたと同時に、

「人の宿題をあてにしないで、自分でやりなさいよ!！」

と、マコの怒号が教室内に響き渡る。

「まあまあ、落ち着いて。」

モジがマコをなだめる口調でしゃべる。

「とりあえず自分でやってみて、分からなかったらボクが教えてあげるから。」

モジはワクに言った。

「甘やかしちゃダメよ、モジ君!」

と、マコ。

ついでにワクをにらみつける。

「教えてくれるって言ったって、全然分かんねえんだもん。まあいいや、後でレイのヤツ見せてもらおうつと。」

「ワク君!…もっつ!」

そろそろマコの怒りのボルテージが限界に近いことを察知したワクは一旦教室をでようとす。ここでワクは教室内の異変に気付く。

「あれ、レイは?」

教室内のほぼ全員が手を止めて、辺りを見る素振りをする。

「そういえば、いないな。」

カンジが答える。

「「…」」

この静寂から察するに、誰もレイの行方をしらないようだ。

「ほっとけ…、オレの知ったことじゃない。」

ウシロが冷たく返す。

その一言に食って掛かろうとマコが声を出そうとするが…

「あ、あれ…。」

カナの主張力の無い声を聞いて、一旦声を喉にためる。
そしてカナの指す方向を見る。

「レイ…よね？」

マコが目を細くしてレイらしき人影を見るが、目が悪いために自分の目視出来る情報ではそれをレイと判別できないらしい。
なのでとりあえずカナに問うてみると、カナは小さく頷いた。
だがそこに映る光景には違和感があった。

「レイのやつ、誰としゃべってるんだ？」

どうやら見かけない人とレイがしゃべっているらしい。

「カナちゃん、見えるか？」

と聞いて、その人が誰なのかを確認させようとする。

「分からない、でも…知らない男の子。」

やはりオレ達の知らないヤツか。
だが地元の子供でないことは分かっている。
何せこの島は過疎化と高齢化が進んで、子供がいまいと云うからだ。
じゃあ誰なんだ、と訝しげな表情で外を見てみると、レイと不審な
男が教室から見える範囲から外れようとする。

「追い掛けよう！」

カンジが叫びつつ玄関に走り出すのを見て、他の子供たちもつられて玄関に向かう。

バタン！！

ドアが閉まり、喧しかった教室は台風が過ぎ去ったかのごとく静寂に包まれた…。

＝
＝
＝

レイは宿題を皆より早く終わらせていた。

そのため手持ちぶさたになっていたレイは、ちよつと息抜き程度で外をぶらついていた。

しかし、見つからないように抜け出したワケでもないのに、誰もそのことに気付かなかつたのは悔しい。

「つまんない…。」

と呟くレイ。

風にレイのショートの前髪がせわしくなびく。
その容貌はまごうことなき美人である。

その容姿につられてきたのだろうか、いつの間にかレイの隣に見知らぬ男の子が立っていた。

「あなた、誰？」

レイは怪訝な表情をして男の子に問うた。

「面白いね、君は。」

することが無くてつまらない事を自覚している、変化を求めているのに、自分からは動こうとしないなんて。」

レイの質問を意に介さず、男の子はしゃべる。
だが、その一言にレイは一瞬心を揺さ振られる。

「あ、あなたは誰なの!？」

核心を突かれた、ような言葉を振り切るようにレイは強い口調で言う。

「ボクは渚カヲル、君と同じく14だ。」

渚カヲルと名乗る男の子はさわやかな笑顔をレイに向ける。

「君は、一人なのかい？」

渚カヲルが問い掛ける。

「一人じゃない、ちゃんと仲間がいるもの。」

レイははっきりと答える。

「だけど君は仲間のいる教室を振り返り見なかった。

ということは、君の大切な人は此処には来てないんだ、良かったね。」

渚カヲルは不敵な笑みを浮かべていた。

その何とも形容しがたい圧力に押されてその場を後退りしようとするレイ。

「いや、別に君を怯えさせるつもりはないよ。」

渚カヲルはレイに向けて手を差し出すが、その手をレイに拒絶される。

「あなたの目的は、何なの？」

「目的、ねえ……。」

そう呟いてまもなく、後ろの方から足音が聞こえてくる。

「レイ、大丈夫か!？」

カンジを先頭に、みんながレイのもとに駆け寄る。

「おい、お前は誰だ？」

「確かこの島には子供はいなかったはずよ。
どうして君のような子供がいるのかしら？」

カンジの質問に付け加えるように、チズが強い口調で論理的思考を述べる。

「やれやれ、これは困ったな。」

渚カヲルは肩をすくめた。

(どうやらボクはこの子たちに敵視されているようだ。まあいい、この子達に決めた。

せいぜいイイ仕事してもらおう。。。)

「君たち、ゲームをしてみないか??」

第3話：黒い、怪獣〈abnormality〉

それはゴールデンウィークの事だった。

NERV本部に敵の襲来を告げる警告音が鳴り響いた。

『太平洋を巡航中の海軍空母《赤城》より入電。
神津島沖にて未確認生物の出現を発見。』

NERV本部は一斉に慌ただしくなる。

「恐らく第4の使徒だろう。」

このNERV本部の副司令官を務める冬月コウゾウが特に慌てる様子もなく淡々と言葉を発する。

「映像入手しました。」

主モニターに回します!」

せわしくコンピューターのキーボードを打ちながら声を張り上げるのは、中央作戦司令部作戦局第一課所属の日向マコトである。

マコトがキーボードのエンターキーを乱暴に叩き、主モニターに未確認生物が大きく映った瞬間に、本部内から『おお〜』と、驚きの声上がる。

そこに映っていたのは、何百メートルを越えるであろう黒い人型の巨大な塊であった。

その中、冬月と総司令の碇ゲンドウは腑に落ちないと言う表情で顔

を見合せていた。

「光球が見当たらないな、どういう事だ？」

ゲンドウが訝しげな表情で呟く。

「分からないな。

それにしても大きすぎるだろう。」

冬月も首をかしげている。

どうやらこの2人にはこの状況は異常な事態みたいだ。

そんな張り詰めた空気の中、さらに目を疑う光景がモニターに映った。

「み、未確認生物がもう一体出現していきますー!!」

半ば狂ったような叫び声を上げながらも、マコトは異様な状況を客観的視点から伝えようと努める。

新たに現れたの怪獣を見ると、6つの肢で海上にそびえ立っている。分かりやすく形容すると《蜘蛛》だろうか。

「使徒の複数展開があるなんて、聞いていないぞー！」

マコトが机に手をつき身を乗り出して、モニターを凝視しつつ叫ぶ。

「パターン…判別出来ません、不明です。」

中央作戦室付オペレーターの青葉シゲルが、パソコン画面に映るゲラフを見て静かに言う。

「しかし…向こうの情報が乏しい以上、こちらから動くわけにはいきませんね。」

「現在、国連軍が偵察機と戦闘機を未確認生物周辺に配置しています。」

「なので国連軍がNERVに指揮権の委譲が行われるまでこちらが動く必要は無いかと…」

シゲルの意見に重なるように、技術局第一課の伊吹マヤが現在の状況を考慮して現状維持をゲンドウに求める。

その時、

2体の怪獣がゆっくりと歩み寄り、人型の怪獣が腕を振りかざした振り下ろされる人型の怪獣の腕を、《蜘蛛》はバックステップして躲す。

そして、《蜘蛛》はビームを人型の怪獣に向かって発射。一旦、人型の怪獣が引いたところで2体はまた停止する。

「か、怪獣同士が闘ってる!？」

マコトは椅子の背もたれに力の抜けた格好でもたれかかる。

「エヴァンゲリオン、出勤させたほうがいいんじゃないか？」

シゲルの一言を耳に挟んだマヤは、

「エヴァンゲリオンパイロットの召集、どういたしますか？」

と、マヤがゲンドウに指示を仰ぐ。

ゲンドウはマヤに向かって軽く頷き、

「総員第一種戦闘配置。」

口の前に手を組み、威厳ある声色でゲンドウが本部全体に指令を出す。

ゲンドウの一言で本部内の空気は一層緊張感を増す。
その言葉からは彼の統率力の強さが伺える。

「使徒ではないのか…？」

「分からん、ただ異常事態なのは確かだ。」

けたたましく警報の鳴り響く中、2人はもう一度顔を見合わす。

確かに空中から突然巨大な怪獣が現れれば間違いなく異常事態だろう。

しかし使徒とてこの黒い怪獣と同列に語られるべき存在であるはずなのに、使徒が出現することに対してはさも通常であるかのような言い草をこの2人はしている。
まるで未来が予測されているかのように…

====

黒い怪獣と《蜘蛛》との戦闘から1週間が経った。

綾波レイはその怪獣のコックピットとおぼしき場所で、戦闘の一部始終を見ていた1人であった。

だが今は何事も無かったかのように学校に来ている。

(どうしてこんな事になったのだろう…)

その理由を考えると一番先に思い浮かぶのは、あの気味の悪い渚カヲルという男の子。彼の言っていた『ゲーム』とはこの事なのだろうか。

それにしても悪趣味すぎる。

コックピットに窓のように広がる風景はまるで現実そのものだった。島の全景も、磯遊びをした海岸も、私たちの泊まっていた宿も…

====

渚カヲルの言った『ゲーム』への参加を決めた後すぐ、私たちは目の前が真っ暗になって、いつのまにか何も無い空間にいた。

渚カヲルはここをコックピットと説明した。

コックピットを見渡すと、見知らぬ男が中に浮く椅子に座っていた。その男は30代前半くらいで、メガネをかけている。

彼はこちらに気付いたが、敵が目の前に現れたために、そちらを向いて険しい表情をした。

その後メガネの男は戦いながらどのようにしてロボットを動かすかを教えてくれた。

敵：《蜘蛛》を倒した後、メガネの男は私たちに言い掛けた。

『黒い塊、積層された装甲、圧倒的な力。

それを操るのは…君たちだ。

これからは君たちがこの地球なんだ、いいね。』

まるでこの先は君たちと闘えないみたいな言い草だった…

＝
＝
＝

そして私たちは、また黒い怪獣のコックピットのなかにいる。

碓君が校内放送で呼ばれてからすぐ警戒宣言が出て、シエルターに避難することになったのだが、一瞬目の前が暗くなったと思ったら、ここにいたのだ。

「さあ、戦闘が始まるよ。

声を受けたのは、誰かな？」

渚カヲルがコックピットの真ん中、集まったみんなの前で立っている。

「オレ…かも。」

何か名前呼ばれたような気がした。」

ワクがおそろおそろ手を挙げて喋りだす。

「そうか、頑張つてね。」

今回、この地球の未来は君に託された。」

そう言つて渚カヲルは不敵な笑みを浮かべた。

それはとても冷たい笑顔、まるで私たちの心を見透かしているかの
ような笑顔だった…

第4話：震駭する、セカイ tremble

シンジが職員室に向かうと見慣れた人が座っていた。

「やあシンジ君、迎えに来たぞ。」

シンジが入ってきたことに気付き、そちらを向いて柔らかな笑みを浮かべる。

彼の名前は加持リョウジ。

NERVの諜報部に所属しているらしい。

という具合で、とにかく謎の多い人だ。

「またエヴァンゲリオン…ですか？」

シンジは加持から目を逸らし、暗い表情をした。

加持はシンジの微妙な心境を感じ取り、静かな声で語り掛けた。

「君がここにいる理由は何だい？」

お父さんを見返すため、大切な人を守るため、いろいろあるだろうが、それを叶えるためには振り絞らなくてはいけない勇気なんだ。大切な人と、ついでにオレたちも守ってくれ。」

「どちらかといえば、ついでの方が本命じゃないんですか？」

加持は歯茎を見せるくらいに大きく笑い、立ち上がった。

加持の笑顔につられて不満そうだったシンジも口角が弛む。

「さて、行くとしますか。」

加持とシンジを乗せた黒塗りの車はNERV本部に向かって急いで走りだした。

■■■■

NERV本部は慌ただしさ漂う空気になっていた。

「第三新東京市直上に未確認物体が2体出現！

一方は先週出現したものと違います！」

前回は《蜘蛛》だったが、今回は違う。

大地をわしづかみにしてそびえ立つ巨大な城だ。

ただ、天守閣が見当たらないため、やぐらのようにも見える。

例えるならば《高檜》だ。

マコトがいつになく険しい声をあげる。

NERV職員が主モニターに映る怪獣に見入っているいとまを奪う声が本部に響く。

「総員第一種戦闘配置だ。」

ゲンドウが前と同じく声をあげる。その声が本部の隅まで届いた時、全職員の気持ちが一体となる。そのように士気が高まったなかで、冷静さを保たなくてはいけないのはやはり、長たるゲンドウだ。

「パイロットはどうした？」

ゲンドウがモニター前のマイクに向かってしゃべりかける。

「加持リョウジが移送中です。」

エヴァンゲリオンの方はパイロットが到着次第300秒で出撃可能です。」

スピーカー越しに聞こえてきたのは女性の声だった。

彼女は赤木リツコ。

EVAの開発責任者、そしてスーパーコンピューター《MAGI》の管理をしている理知的かつ現実的な女性科学者である。

「ダミープラグの方は使えるのか？」

「まだ実戦投入出来る状態ではありません。」

二号機へのリンク実験もまだ完了してませんし…」

「分かった。」

と言って、ゲンドウはモニターの双方向回線を切って別の区画の監視カメラの画像に替えた。

そのうちの一つに、黒塗りの車がNERV本部に入ってきて来る映像が映し出された。

シンジの乗った車だ。

「エヴァンゲリオンでこの巨体どもに勝てるのか？」

「分らん。」

だが、殲滅しなくては何らかの被害が及ぶのは周知の事だ。

ゼーレの教典と言うべき死海文書が予測した未来が書き換えられた今、微々たる異常や障害でも認められるものではない。」

ゲンドウは眼鏡を取り外す。

その内からは、眼光鋭く、決意に満ちた表情が覗いた。

冬月はやれやれという表情を浮かべる。

そうしているうちに、準備が出来た、戦闘開始だ。

■■■■

「いい、シンジ君？」

この敵は基本的には近接攻撃、つまり殴る蹴るが主体です。

ですから、ATフィールドを展開して敵の攻撃を回避しつつ、攻撃を仕掛けて下さい。」

「はい。」

「片方の黒い怪獣はレーザーのようなものを身につけていることが分かっていますから、くれぐれも慎重に。」

「はい…」

リツコの説明にシンジはただ淡々とうなずくだけだ。そんなところはお構い無しに作戦は開始される。

「エヴァンゲリオン初号機、発進！」

マヤが初号機出陣の号令を叫び、初号機は地上に姿を現す。

シンジは地上に出て、敵を捕捉しようと辺りを見渡す。

でかい…

シンジが心のなかで思ったのは、それ一つだった。

エヴァンゲリオンと黒い怪獣は十分な距離を保っているにも関わらず、その巨体故の上から覆いかぶさるように襲ってくる圧迫感がある。

それによりシンジは後退りしなければという思考が働き、エヴァンゲリオンを後退させる。

「ど、どうすればいいんですか、リツコさん？」

シンジは困惑した様子でリツコに聞く。
その表情にはいささかの驚きと、畏怖が見え隠れしていた。

「まだ動かなくていいわ。」

あなたは生き残った方の怪獣のみを殲滅すればいいのよ。」

「生き残った…?」

事情をよく知るはずの無いシンジにも疑問が浮かんだ。

(怪獣同士が戦うって事なのかな?
って事は…)

「使徒…じゃないんですか、リツコさん?」

シンジはおそろおそろ聞いてみる。

「そつよ、おそらく使徒ではないわ。」

でも本当の事を言つとこちらも何も分かってないの。」

リツコの言葉は奥歯にものが引っ掛かったような言い草だった。

「勝機はあるんですか?」

「やってみないと分からない、かしらねえ。」

その声からはいつもの自信に満ちたリッコの様子を感じ取れない。

「とにかくシンジ君、あなたは全力を尽くすことだけを考えなさい。」

「はい。」

怪獣たちが動きだした。

一見動きは鈍く、早さは感じられないがその実、腕の先端などは軽く音速を越えている。

黒い怪獣はゆっくりと《高櫓》に向かって歩みを進める。《高櫓》は頂上のやぐら台のような部分を90度ほど回転させたのみで、ほとんど動きがない。

黒い怪獣は《高櫓》に手の届く距離まで詰め寄る。

そして、腕を振りかざして攻撃しようとした瞬間、目の前の地面が瞬間にして弾け飛んだ。

（なんだ!?

触手みたいなのが…。）

シンジは自分の任務を忘れて、2体の怪獣の闘いに見入っている。

それは遠巻きに見ているシンジにもはっきりと確認出来るほどの太さの触手であった。

まるで天守閣を打ち落とさんとする敵の侵入を拒む堀が、城を囲んでいるかの如く、触手が《高櫓》の回りを囲む。

その光景に出くわして、黒い怪獣は振りかざした腕を一旦止める。

膠着状態になってしまった。

お互いに見合っていて、動きがまったく無い。

とりあえず黒い怪獣は《高櫓》の触手の及ばないであろう範囲まで下がろうとする。

その時だった。

いきなり黒い怪獣を囲むように触手が地面から生えてきたのだ…

コックピットの中は慌ただしかった。

「なんだ!?!」

と、ワクが声をあげる。

コックピットに大画面で映し出される光景はすべて触手で覆い尽くされる。

触手は上体を曲げて取りつき、黒い怪獣を締め潰そうとする。バキバキと音を立てて壊れていく黒い怪獣。その光景を目の当たりにして、ワクの口から出る言葉は一つ。

「ちくしょう、ちくしょう！」

ワクはその言葉を連呼する。

「おい、何とかならねえのかよ、渚！」

「それは無理だよ。」

君たちがゲームのステージに立った以上、ぼくは手出し出来ないからな。」

ワクの必死の叫びにカヲルはそっけなく答える。

「ちくしょう！！」

叫んでも、叫んでも、ただワクの声だけがコックピットにひびくだけだった。

その時ワクの声に掻き消されながらも声が聞こえた。

「ワク…今なら右足が動かせるよ。」

キリエが遠慮がちにワクに言う。

「本当か!?!」

さっきまでの狼狽ぶりを一変させて、キリエの一言にすがりつくように反応するワク。

とにかく動かそう

そう思いワクは右足を動かすように念じる。そうすると、黒い怪獣の右足はいとも簡単に《高櫓》の触手をすり抜けた。

「やった!」

コックピット内から歓声上がる。

「すげえ、よく分かったな、キリエ!」

ワクは嬉しさと驚きの混じったような表情をする。

そう、キリエは見逃さなかったのだ。

敵の触手が一瞬ながら力を抜いたのを。

「ようし、じゃあ反撃だぜ!」

ワクは元気を取り戻して、威勢の良い声をあげる。

まず、抜けた右足を振り回し、周りの触手をなぎはらう
触手は思った以上に脆く、一撃で簡単に折れたり、動かなくなった
りしていた。

「よしっ、いけるぞ！
たため、ワク！」

カンジは軽く命令口調でワクに言い掛ける。

しかし《高櫓》も黙ってはいない。

触手は掴んでいる左腕を上につ張り上げ、黒い怪獣に攻撃をさせ
ないようにする。

そして、少しのタメを作ったあと、天高くへ黒い怪獣を放り投げた。
コックピット内のスクリーンから見える街の景色が、より一層小さ
くなっていく。

「うわぁあああああ！！！！！！」

ワクの情けない叫びが膨れあがるとともに、黒い怪獣は地面へと落
下していく。

その真下には、見たこともないロボットのようなものが1体いた：

「ATフィールド展開よ、シンジ君!!」

リツコの叫び声がエントリープラグ内に響く。

シンジは言われたままにATフィールドを展開する。

一瞬で暗くなった

そう感じたシンジが上を見上げると、先刻遠くで闘っていた黒い怪物がすぐ上にあった。

何が起こったのかわからなかった。

シンジが叫ぶ暇もなく黒い怪物はエヴァンゲリオンに襲い掛かる。

だが先ほどリツコに言われるがままに展開したATフィールドが、500メートルもあるつかという巨体の重力攻撃を受け止める。

「う、ううあ…あっ…」

「どうしたの、シンジ君!？」

「……………」

シンジからの返事がない、何かが起こっている。

NERV本部にある大量の計測機は、心理グラフに乱れがあることを警告音で知らせた。

「精神防壁を展開、A10神経接続を55までカット、急いで!」
リツコの表情が険しくなる。

シンジも、ううと唸っているだけである。

(なんだ…?)

何かが頭に流れ込んでくる…。()

…sに…tkない

不気味な声と同時に、シンジの頭の中には、真っ白な空間に9人の子供たちが座っている様子が浮かび上がる。

(????)

…子供たちがいる。

ぼくと同じくらいかな？()

sにたく…ない…

声が次第に大きくなっていく。

(何かが聞こえる…)。

誰かが何かしゃべってるのか？()

しにたく、な…い

声はつきりと、シンジの耳に届く。

(し、死ぬ？)

何なんだ、いったい？)

しにたくない

その声は魂に直接響く。

その時突然、シンジが見たこともない映像が脳内に浮かび上がる。

「う…。」

…あ、綾波??？」

フラッシュカットされた映像に一瞬、椅子に座った綾波が浮かぶ。
そして…

『死にたくない!!』

「うわぁあああああああああああ…!!…!!…!!…!!…!!」

泣き喚く人、大勢の人々の骸、灰色に染まった空。
シンジの頭に映像がフラッシュユカットされて鮮明に浮かび上がる。
声の主はこの人たちだったのか。

それはひどく醜悪な、まるでこの世の終わりを映したような光景ばかりだった。

第5話・真実の映す、絶望（despair）（前書き）

感想など、よろしく願います。

第5話：真実の映す、絶望 despair

広がる。

広がる。

ATフィールドが全てを拒むかのように、
車を

兵装ビルを

次々と薙ぎ倒して広がっていく。

沸き上がる大拳に影響されたのか、ATフィールドの内側は怪しく
紫がかっている。

黒い怪獣はその巨体を翻して立ち上がり、増幅するATフィールド
から逃げる。

初号機はうずくまったまま動かない。
それでもなお、ATフィールドは膨らむ。
いったいどこまで広がるのだろうか。

「心理グラフ、安定しません！」

「エヴァンゲリオンからの逆流が確認されています！
このままでは精神汚染が…！！！」

「ATフィールドさらに増幅、初号機を中心に同心円状に広がっていきます!」

本部の至るところから警告音がきこえる。

マヤやシゲルの目前にあるコンピュータの画面にも『ALERT』や『警告』の文字が表示されている。まさに緊急事態、ただならぬ雰囲気にも包まれる。

「アンビリカルケーブル除去!」

リッコの指示で、アンビリカルケーブルが初号機から取り外される。

「初号機との接続を全面カット!」

「…ダメです!
信号が拒絶されました!」

「エントリープラグ強制射出!」

「エントリープラグの射出信号も受け付けてくれません!」

リッコはシンジを救出する手段をマヤに伝え、それを試すもの、ことごとく失敗に終わる。

「くっ…。」

リッコはもどかしそうに唇を噛む。
何か他に出来る事はないのかと考えてみるが、思い浮かばない。

「爆碎ボルトに点火して、初号機を強制的に回収するのはダメなんですか？」

「ダメよ。」

A1フィールドで本部がバラバラになっちゃっわ。」

緊急時の対処方法も役に立たない。
完全に手詰まりだ。」

「…あと何秒で活動停止？」

リッコがマヤに近づき、ささやくような声で訊ねる。

「あと、187秒です。」

あと約3分。

私たちに出来る事は、もうない。

延々と膨らむ『拒絶する心』をただ見守るだけだ…

「くうづうう…がっ……」

はあ、はあ……」

黒い怪獣が地面に叩きつけられた瞬間、ワクが突然苦しみだした。

「大丈夫、ワク君!？」

「ワク、どこか打ったのか？」

マコとカンジがワクの身を案じて声をかけるが、唸っているのみで反応がない。

「……………う…あ…あああああ!!!!」

腕を抱えこむようにしてうずくまり、叫ぶワク。

その直後、黒い怪獣は身を翻して立ち上がり、ATフィールドから逃げるように走り出す。

「はあ、はあ、はあ…」

「おい、大丈夫かよ？」

「…ああ、何とか大丈夫だよ。」

ワクは心配するカンジに向かって笑い、大丈夫であることをアピールする。

しかしその表情は次第に険しくなっていく。

「なんだこれ……………」

ワクは、眼下に異様な光景を見つけた。
まるで原子爆弾が落ちて爆発する瞬間をスロー再生するかの如く、
おびたらしいエネルギーを放出する半球状の紫がかったオーラが膨
らんでいる。

他の皆も言葉を失って、しばしコックピットに沈黙が訪れる。

「…ねえワク、このオーラにまた巻き込まれる前に安全な所へ避難
したほうがいいんじゃないか？」

モジが口を開き沈黙を破る。

「そ、そうだな。」

提案を聞き入れてワクは黒い怪獣を動かす。

敵の攻撃を警戒して、地面と《高櫓》本体を注視しながら、ゆっく
りと歩いていく。

だが、敵は依然動かない。

そうして歩いているうちに、《高櫓》が広がるオーラに飲み込まれ
た。

灰色がかっていた《高櫓》は真っ白に変化する。

一瞬、敵の攻撃が来るのではと思って皆は身構えたが、どうやらそ
うではなかったみたいだ。

「なによ、攻撃してこないじゃない。」

チズが、《高櫓》がなかなか攻撃してこない事をつまらなく思ったのか、敵の反撃を催促するかのような一言をしゃべりだす。

「攻撃してこない方がこつちにとっては好都合じゃない。」

と、一言。

マコはチズ言葉に突っ掛かっていく。

「な、何よ。」

チズは眉をひそめてマコを睨むが、目線を逸らしてそっぽを向いてしまう。

正当な意見で反論されて、言葉が出なかったみたいだ。

「やめとけ、2人とも。」

とりあえずカンジの仲裁が入るが、チズもマコもまだ何か言いたげな表情をしていた。

その2人のやりとりを聞いていたワクが、

「あー、試しに一発撃ってみようかなあー。」

と、わざとらしく言って、《高櫓》をコックピットの窓に映した時だった。

「あつ…!!!!」

「見ろ、敵が崩れていくぞ!!」

《高櫓》が無抵抗に崩れ落ちていく様子がそこにはあった。その光景のダイジェストを、カンジはあたかも今自分だけが気付いたかのように叫ぶ。

「どうして!?!」

「あのオーラのせい…なのかな?」

「おそらくそうだろう。」

各々が顔を見合せて、なぜ、どうして、と議論を交わす。だがそんな事を真剣に考えているヤツはいない。

『これなら急所を狙うだけで簡単に勝てるんじゃないか? いや、もう勝ったんじゃないかな?』

と、誰もが考えていた。

ただ、雰囲気的に、一度始まった議論を途中で止める事を厭わしく思い、言いださなただけだった。

それに、皆気付いているであろう事を口にするのもどうか、と思うたという事もあるだろう。

だが案の定、

「敵の急所が壊れた。」

君たちの勝ちだ、おめでとう。」

カヲルは微笑んで皆に告げてしまった。

陳腐な議論が終わると同時に、場の興奮は少し落ち着きを見せる。

「ちえー、これで終わりかよー。」

もっとバトル的な物を期待してたんだけどなあ。」

ワクは不満そうに物を言う。

それでもワクは満足げな表情を浮かべていた。

ワクは黒い怪獣の動きを止めて、椅子から降りる。

ATフィールドが消失して、逃げる必要が無くなったからだ。

「それで、人形に乗って圧倒的な力をふるってみて、どうだったかい？」

まるでインタビューのように、カヲルはワクに訊ねてみる。

「ヒーローになったみたいで、なかなか面白かったぜ。」

ただ地球を守るヒーローにしてはロボットが武骨すぎる…

ってかこのロボットの呼び名って決まってるのか？」

カヲルの質問を半ば無視して、ワクは唐突な質問を逆に返す。

「確かに、ただロボットや人形って呼んでるんじゃないわよね。」

と、ワクの疑問にマコも同調。

カヲルは話が逸れた事に少しの不快感を覚えたが、それを気にする事もなく質問に答える。

「人形ってのは便宜上の呼び名だけだね。

名前は君たちが勝手に決めてくれても別に構わないけど、僕達がやっていた時は、地球を守る《ジァース》なんて風に付けたかな？」

そう言ってカヲルはおもむろに紙とペンを手元に転送し、アルファベットのつづりを書いて見せた。

『Zearth』

と書いてある。

カヲル曰く、最初の文字が、`The` ではなくて、`Z` なのは、何かこっちの方が最強っぽく見えるから、らしい。

「ジァース…」

地球を守る、ジァースかぁ。

カッコよくてイイと思うぜ、オレは。
どうだ、みんなは?」

ワクは皆に問うてみる。

「私は、それでイイと思う。」

「オレも。」

「ぼくもそれでイイと思うよ。」

「う、うん...。」

他の子たちも頷いた。
満場一致のようだ。

ロボットの名前も決まり、意欲が高まったのか、話題は早くも次のゲームの事に移っていく。
そんな中...

キリエだけ一人、暗い顔をしていた。

「あのさ...」

「ん?」

「あの...さ、このゲームって本当にゲームなのかな??」

突然キリエが皆に問い掛けるようにしゃべり出す。

「キリエ、何言ってるんだよ。そんな事あるわけないじゃん、ゲムなんだし。」

と、ワクはすぐさま反論。

「そ、そうだよね…。」

そしてキリエは自分の意見の間違いをあっさりと認めてしまった。

ワクは呆れ顔になって、

「まったく、キリエは心配性すぎ……………」。

ワクの声が次第にフェードアウトしていく。それと同時に、体の力が抜けていく。そして…

ドサッ、

突然、コックピットに不可解な音が響いた。

「え?」

皆が音のした方向を振りかえる。
そこには力なくうつ伏せたワクがあった。

誰もが啞然としている。

目の前で見ていたキリエでさえ、状況が飲み込めなかった。

「ワク君！　ワク君！！」

キリエが駆け寄ってワクに呼び掛ける。

「どうした、ワク！」

「ワク君！？」

「ワク！」

皆一斉にワクの元に駆け寄る。
だが呼び掛けても何の反応もなし、まるで糸の切れた操り人形のようである。

「おい、ふざけてんのかお前！」

「カンジ、揺すらないほうがいい。」

そう言ってモジはワクに近づき、最も信じたくない事実の白か黒かを明確にしてしまう行為を試してみる。

一瞬にして、驚きと恐懼がない交ぜになった表情に変わった。

（脈が感じとれない。

まさか…）

「し、死んでる…？」

信じたくない事実が明確になった瞬間だった。

無常なるワクの骸を目の前にし、皆は目を剥きおののいている。

マコやレイに関しては、今にも倒れてしまいそうなくらいに顔面蒼白している。

そして、とうとうその恐怖に耐え切れなくなってしまった。

「いやあああああああああ！！！！！！」

マコが目の前の現実の理解を否定するかのように、頭を抱えて痛哭する。

悲嘆と驚愕に暮れる子供たちを痛々しい叫びが包みこむ。

だが、カヲルだけは無機質な表情でワクの死体を見下げていた。

その様子に気付いたウシロが、

「お前、何か隠してるだろ。
そうでなければ、どうして平然としていられるんだ？」

と、込み上げてくる恐怖を押さえ、毅然たる態度でカヲルを問いた
だす。

「別に隠すつもりも無かったんだけど……。」

そう言っつて、カヲルは事の真実を話しはじめた。

「ぼくは君たちに『これはゲームだ』って説明したけれど、それは
君たちの想像しているものとは違うんだ。
分かるかな？」

とりあえず周りを見渡してみる。

皆の様子は、何を言っているのか全く分からないという感じだった。
だがそれをよそに、カヲルは説明を続ける。

「つまり、ただのゲームのようにおいそれとリセット出来る物じゃ
ないっていうことだよ。」

窓に映る映像だって、全て現実、CGなんかじゃない。
倒れたビルも、死んだ人たちもだ。

因みに、一度契約したらその契約は絶対に解除出来ない、抜けるこ
とは出来ないんだ。」

説明が延々と続く。

そんな、聞くに堪えない状況に痺れを切らしたカンジがカヲルに訊

ねる。

「じゃあ、ワクが死んじまったのはどーゆー事だよ？」

カンジの一言からは、やり場の無い感情を感じ取れる。だが、口にした後に残るのは何とも言えない歯痒さ。

そしてカヲルはとうとう、地獄の境地にいる彼らを奈落の底に落とす一言を発した。

「ジァースはパイロットの生命力で動くんだ。

だから一戦動かしたら、そのパイロットは、死ぬ。」

止めることの出来ない死へのカウントダウンが、今ぼくたちに宣告された。

ぼくたちはこの世界を、この運命を、ただただ恨んだ。そんな事しか出来なかったのだ。

そんな事しか…

第6話：力の代償（rebound）（前書き）

やっと話の輪郭が見えてきた感じですが。

感想や評価など、気が向いたらよろしくお願いします。

第6話：力の代償（rebound）

初号機の沈黙と共に、本部内の警報が鳴り止む。

机に手をつき、うつむいて息を吐くリツコ。

「現時刻をもって作戦を終了します。
状況イエローに速やかに移行。」

そう言っつてリツコは力なく椅子に座り、背もたれにもたれかかる。
顔には安堵の表情が浮かんでいた。

「了解、第一種警戒態勢に移行。」

「初号機は西側の14番ルートから回収。
回収後は、パイロットを保護を最優先とします。」

「崩壊した怪獣は前回と同様、消えていきます。
この後、黒い怪獣が消失し次第、復旧作業開始。」

3人とも、慣れた様子で事後処理を進めていく。

各部署に指令を出すオペレーター達の声が響く中、ゲンドウはモニター越しに誰かと話している。

「赤木リツコ博士、後は頼みます。」

「はい。」

そう言っつて、本部を後にしてどこかへ行ってしまった。

＝
＝
＝

非常事態宣言が解除されてから1時間が経った。

幸いにも市民は山沿いのシェルターに避難していたので、死者は数名しか出なかった。

しかし、黒い怪獣と《高櫓》の闘いで、兵装ビルなどはおおかた破壊されてしまい、見るも無残な光景になっている。

その原因は何なのか。

テレビやラジオは正確な情報を市民に提供してくれるはずもない。何せ国家機密級の一大事なのだから。

『今日午前10時ごろ、第三新東京市北西で原因不明の爆発事故が発生致しました。』

政府及び各関係機関はこの事件について調査を開始し……』

ブツッ、

「どうしたんや、ケンスケ？」

「どうしたもこうしたも、政府の手で情報操作されたようなニュースしかやってないんだよ。」

ケンスケはつまらなさそうな顔をして、先程から携帯のワンセグ画面に向かってぶつくさ言っている。

「そんな事にいちいち腹立てるんなんてお前くらいのもんや。」

トウジはだるそうに体を起こし、曇り声でしゃべる。

「いいや、宇白先生もトイレで同じような事言ってた。」

「あー、はいはい。」

良かったなあ、仲間がいて。」

ケンスケは反論するものの、トウジに軽くあしらわれてしまった。

会話が途絶える。

そしてトウジは水を一口飲んで、また床に寝転がる。

「暇そうだな、トウジも。」

そう言ってケンスケも床に寝転がる。

「あつたり前や！」

こんな所におって何が楽しいことがあるかいな!！」

そう言つとトウジは寝返りを打ち、そっぽを向いてしまった。

ケンスケはため息をつき、もう一度携帯を取り出してテレビを見始める。

だが報道はいまだに、謎の爆発事故の一点張りを続けていた。

「碇、今回も頑張つてたんだろっなあ。」

テレビの画像を見ながらシンジが闘つ姿を想像し、ケンスケは思わず呟く。

「シンジなら大丈夫や、何も心配あらへん。」

「そうだな。」

自分たちに出来ることは無事を祈つて待つだけ。そこには何も出来ないもどかしさが残っていた。

■■■■

一瞬にして帰ってきた。

真っ暗な私の家。

とりあえず身体は帰って来たのに、心はまだコックピットの中を彷徨っている感じがする。

ワク君が死んだ。

あっけなく死んだ。

そして私たちもいつか：あっけなく死ぬ。

私たちが負けてこの地球が滅亡するか、勝って死んでいくかのどちらかだ。

とにかく、死は確定している。

逃れる手段はない。

「私、死ぬのかな。」

レイは誰もいない、薄暗い部屋で誰かに訊ねるかのように言葉を発する。

無論、返事が返ってくるはずもない。

レイは虚脱感に襲われ、ベッドに倒れこんだ。

(このまま眠ってしまおう。

そうすれば辛いことを考えずに済むから…)。

そう思って目を閉じるが、目を閉じれば今日の出来事がさらに鮮明に思い浮かぶ。

そしてその記憶が悟らせるものは無力感。

目の前に立ちはだかる死というリアルに対して、何の抵抗もするこ
とが出来ない。

そんな事を抽象しているかのような光景だ。

(私たちの命は使い捨てられるだけなの?)

後ろ向きな考えがレイの頭に浮かぶ。

体が震える。

動けない。

(どうして?)

死ぬのが怖いから?

いや、死ぬのが怖いのではない…と言ったら嘘になるけど…

いくら地球を守るためと言っても、そのために自分の命が使い
捨てられて死んでゆくのが怖い。

世界の人たちの幸せを守るなんて責任、私には耐えきれないの。

だから私は、私の身近な人に幸せを分けてあげられるだけでいい。

…って、碓君の受け売りだけど、私もそう思う。

だからこんな大きな力はいらさないの。

小さな力で良かったのに、

それだけで良かったのに…。」

「死にたく…ない…。」

レイは、死の恐怖に屈してしまった。

仕方がないことかも知れないが、悔しかった。

レイは枕に顔を埋めて、嗚咽混じりの声で呟いた。

その時突然、玄関のドアが開く音がした。

レイはその音に気付いて玄関の方向に顔を向けるが、動こうとはしない。

そして、部屋のドアが開いた。

そこに立っていたのは黒服の男が3人。

「綾波レイだな。」

「……………」

黒服の一人が敲つ声で呼びかけるも、レイは反応しない。

「保安条例第6項の適用により、君を本部まで連行する。」

レイの返事を待たず、ベッドに伏せているレイの腕をつかみあげて

立たせようとするが、それでも起き上がらない。

完全に力の抜け切った身体は、寒さではなく恐怖で震えている。

「おい。」

黒服の一人が後ろの二人によびかけると、二人はレイを持ち上げる。

軽々と持ち上がった。

そして黒服たちに抱えられて、黒塗りの車の中へと入っていった。

■■■■

いつのまにか知らない風景が眼前に広がっている。

壁には『NERV』と書かれたロゴがある。

車は、周りが鉄骨に囲まれたところで停まった。

そこからは黒服の誘導のまま、迷路のような道を進んでいく。

「ここだ、入れ。」

黒服に言われてレイは部屋に入ると、そこにはワクを除いた7人のパイロット全員がいた。

「レイ…」

マコはレイの姿を見て、安堵の表情を浮かべる。

「どうして…？」

訝しげな表情でレイは訊ねる。

「突然黒服のおっさんたちが押し掛けてきたのよ。」

そうしたら条例が何だのと言って脅されてここに来たってわけ。」

と説明するチズ。

その口調と態度からするに、若干ご機嫌斜めのようなふうだ。

「手荒な真似をして済まなかった。」

突然、後ろの方から声が聞こえた。

子供たちは全員そちらに振り向く。

そこには、ひげを生やし眼鏡を掛けた、いかにも厳格そうな人が立っていた。

「私は特務機関ネルフの最高司令長官の碇ゲンドウだ。」

とても威厳のある声だ。

子供たちに緊張が走る。

「簡潔に言おう。」

先程第三新東京市に未確認物体が2体出現した。

その片方は先週に日本領神津島近海で出現したものと同一の物だった。

そして、そのの住民に聞き込みをしてみると、戦闘の時に臨海学校で来ていた子供達が怪獣の戦闘時に姿を消していたと証言している。

「

子供達の表情がだんだんと強ばっていく。

平静を装おうとしているのが見え見えだった。

その様子を見て、ゲンドウは口調を強める。

「なのでネルフ保安課報部が3日前から監視をしていたのだが、君たちが突然空間から消滅したという報告を受けている。

それもここにいる8人と行方不明の和久隆君を含めた9人が今回の戦闘開始8〜10分前に、姿を消したと報告が来た。

このことから、きみたちが一連の怪獣事件に絡んでいるということが疑われたために、ここに呼び出した次第だ。」

完全にばれている。

焦った子供達は首を回して他の子の様子を伺う。

そんな中、モジが首を小さく横に振っていた。

(まだ黙っていよう。)

おそらくそう言っているのだろう。

モジは言葉にはしていないが、他の子供達はモジの様子から察して、この後どうすれば良いのかを理解した。それはもちろん、沈黙。

先程までの狼狽ぶりと一変して、皆下を向いて黙ってしまふ。

見兼ねたゲンドウは、

「ちなみにこれは国家の非常事態だ。出来ればそちらの自発的な協力を得たい。それが得られないのであれば、こちらも強引にいかざるをえまい。」

と、内ポケットから何かを取り出しながら言った。現れたものは、拳銃だった。

子供達は目を疑った。

怖気が子供達の全身を襲う。

そして一瞬にして感じた。

殺される、と。

これはヤバい、どうにかしろと脳が告げた。

このままでは皆やられてしまうと、モジは直感で思った。

モジはあわてて、

「カヲル、渚カヲル！！」

と叫んだ。

「はいはい、分かりましたよ。」

どこからか声が聞こえる。

そしていつものように、ワープのようにして突然現れた。

さすがのゲンドウも、驚きを隠せない。

一瞬引き金を引きかけたが踏みとどまり、拳銃のハンマーを上げて内ポケットにしまう。

「何だ、お前は。」

どすの利いた声で、カヲルに問い掛ける。

「ぼくは渚カヲルです。」

カヲルは威圧的な態度をとるゲンドウに対して、動揺する事なく対応する。

「ゲームの進行と、彼らの戦いのサポート役を務めています。」

「おい、カヲル！」

カヲルの言葉に重なるようにして、カンジが言う。

「大丈夫、君たちの心配には及ばないよ。」

と、カヲルは後ろを振り返ってカンジに言った。
そしてすぐに前を向き、ゲンドウと目を合わせる。

「あの怪獣どもは何だ。」

「それはぼくにも分かりかねます。」

ただ、ぼくはジアースの管理を任されているだけです。」

「お前に管理を任せた者は誰だ？」

「ジアースをぼくに引き渡したのはとりあえず人間ですよ。」

ただ、元をたどっていけば、神が人間に怪獣を渡したのではとぼくは考えますが。」

カヲルとゲンドウの問答が続く。

「ジアースとはあの黒い怪獣の事か？」

「はい、そうです。」

「そのジァースとやらを先程動かしていたのは、誰だ？」

「今ここにはいませんが、和久隆という子が操縦していました。」

「その子は。」

「死亡しました。」

「あの黒い怪獣はどこに保管してある？」

「とりあえず、今は海の中に隠してあります。」

ゲンドウは問答を止めて、口に手を当てて考える素振りを見せる。そしておもむろに眼鏡を指で軽く上げて、

「ただ今10時38分をもって、コードネーム『ジァース』は日本政府及び特務機関NERVの管轄下に置く。」

「おい、ちょっと待てよ！」

突然、カンジがゲンドウの指令に待ったをかけた。

「オレたちが当事者なのに、その話も聞かないでそんな決定するなよ！」

「先程も言ったように、これは国家レベルの非常事態だ。君たち子供に任せておけるはずが無かるう。」

「でも…、」

ゲンドウの発言に食らい付いていこうとするカンジ。しかし、その先の言葉が出てこない。

ゲンドウの威圧的な態度に、カンジは思わず足がすくんでしまう。それに、言っていることは明らかに向こうの方が正しい。カンジは言葉を返す事が出来なかった。

「ちょっと待ってくださいよ。」

今度はカラルがゲンドウに抗議する。

「あいにくジァースはこの8人の子供達をパイロットとして認めているんです。

そちらの管理下に置いたとしても、当事者は彼らです。」

カラルの発言を聞いて、黙るゲンドウ。

しかしカラルと目線は逸らさず、往々と構えて立っている。

その時、サイレンが部屋に鳴り響いた。

「もう来たか。」

天井を見上げて、ゲンドウはつぶやく。そして子供達の方を振り向いて、

「ならば戦闘指示と観察者を付ける。

パイロットはその人の指示に従い、勝手に動かさない事。」

そうやってゲンドウは携帯を取り出し、どこかへ連絡を取った。

1分後、部屋に女性と男性が一人づつ入ってきた。

「紹介する。

こちらが葛城ミサト三佐だ。」

「よろしく、みんな。」

かなりの美人だ。

カンジに関しては、今自分の置かれている状態を忘れ、ミサトの容姿に見惚れて鼻を伸ばしている。

「そしてこちらが関マサミツ三佐。

戦闘指南を行ってもらおう。」

「よろしく。」

いかにも真面目そうな軍人という雰囲気だ。

だが、何となく頼りない感じがするのは気のせいかと、チズは心の中であらう思った。

「なお、君たちは数日間こちらの用意した宿舎で生活してもらおう。親には連絡を入れてあり、許可も取れている。」

ゲンドウの一言に、子供達はどよめく。

文句の一つも言いたいが、ゲンドウ達の手の早さと独断ぶりに、言う気も失せてきたという感じで、子供たちはあきれ顔でゲンドウをにらんでいる。

「葛城三佐、関三佐、後をよろしく頼みます。」

と言って、ゲンドウは部屋から去っていった。

カンジはミサトや関に聞こえないくらいの声で、ゲンドウをバカにするような言葉を羅列していた。

「さて…今こちらに向かって使徒が接近中なんだけど、何秒くらいでそのロボットを第三新東京市にもってこれるかな？」

ゲンドウが退出した後、関が優しい口調で子供達に訊ねる。

「持つてくるのは簡単です。」

転送すれば1分で第三…東京ですか？

その市街地のど真ん中に出現させられますよ。」

カヲルは答える。

「転送ですかあ…。」
では、早急に転送を開始してください。
間もなく使徒が防衛線を越えて第三新東京市へやってきます。
パイロットのみんなも、そのロボットに乗ってください。
戦闘が始まります。」

どうやら関は、ロボット、つまりギアースをガ○ダムのような物だと勘違いしてるようだった。
それを聞いて、子供達の中には、暗く、悲しい空気が広がっていった。

そんな子供達の様子を見かねて。

「悲しんでいるところ悪いけど、今は使徒撃退が最優先よ。
今NERVも戦力不足なの。
だから、あなたたちの力を貸してほしいの。」

と、ミサトは子供達に無神経な一言を浴びせる。

これこそが、部外者でしゃしゃり出てくるヤツの迷惑な所だ。
気に掛けていること、言っではいけないことをさらっと悪びれる様子もなく言ってしまうのだから。

もちろんその言葉を聞いた子供達は心穏やかでない。

「お前っ、簡単に言いやがって…!!」

「カンジ、やめろ!!」

ミサトに殴りかかるうとするカンジをモジが引き止める。そしてカンジを落ち着かせると、モジはミサトに向かって口を開いた。

「簡単に言わないで下さい。

ジースはぼくたちもおいそれと使える物じゃないんです。

あれの動力は、人の…人の命、生命力なんです。

だから、今動かしたら、その動かしたパイロットは…死ぬんです。カンジが怒るわけも分かります。

ですから、今の一言、取り消してください。」

モジは唇を噛み締めて、悔しそうに言う。

他の子供達も暗く沈んでいる。

レイはモジの言葉を聞いてワクの事を思い出してしまい、悲しくなつて顔を伏せてしまっていた。

そんな中、関は突然事知った様子で喋りだした。

「そうか…。

じゃあ君たちは地球を守るためにあの敵と闘ってるんだね。」

その関の様子は言うまでもなく、子供達の疑問を引き出す。

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

皆を代表して、チズは予想外の反応の理由を訊ねる。

「僕の持つてるマンガでね、今の君たちの状況とよく似た設定のものがあるんだ。」

今ジアースっていう風に呼んでいたけど、きっとその呼び名はそのマンガのロボットから取ったんだと思うよ。だけど…」

関はちよつと自慢気に子供達に語る。

一言、彼はオタクだ。

だが関はその先を語ろうとしない。

何か言うと都合の悪いことでもあるのだろうか。

「ちなみに、そのマンガの最後は…どうなったんですか？」

カンジがおそろおそろ訊ねる。

だが、関はまだ黙ったままだ。

(こんなこと…口に出せない。だけど…)

「その子供たちは…全員死んじゃうんだ。」

最後に、地球も滅亡しちゃって。」

やつと口を割った。

だが関の口から出た言葉は、今子供達の思い描く最悪の展開と全く同じだった。

子供達は静まり返った。

「じゅめん…。」

ただ、その関の一言がとても悲しくて、とても嬉しかったのをぼくたちは覚えてる。

第7話：神のみぞ、知る〜detect〜

そこは無に等しき空間。

だがしかし、まるで世界がここから生まれゆくかのように、得体の
知れないエネルギーで満ち満ちている。

そして突然の、魂を震わす声。

『時空の淘汰が進んでゆく。』

初老を迎えたくらいの男性の声と例えるのが妥当だろうか。
声と共に、何も無い空間に燦然と輝く光の玉が浮かび上がる。

『枝分かれを繰り返し無限にはびこりつつある時空の剪定をしな
ければ、宇宙の可能性は際限なく広がってしまうからな。』

今度は先程の声より幾分か若々しい声が聞こえた。
そして同じく光の玉が現れる。

『そうね、このまま放っておいたら私たちの手が届かなくなっ
ちやうものね。』

次は女性の声だ。

光の玉がどんどん増えていく。

そしていつの間にか、白い空間はまばゆいほどの光で覆いつくされ

た。

笑い声も聞こえる。

和気藹々とした雰囲気は、仲の良い『家族』を思わせる。

『皆の衆、静まれ。』

声が重く響く。

他の光の玉よりも格段に強い灯りを放っている。

上から目線の物言いであることから、年配の、この集団の長に当たるものだろうか。

現代のグローバルな環境においても（この世界が私たちと同じ歴史を辿っているとは限らないが…）、この手の言葉は、使うに然るべき人が使えば、人々を服従させるに効果は抜群だ。

辺りはすっかり静まり返ってしまった。

『先程、《地の世界》から天界への精神的干渉が認められた。』

この事から、この《地の世界》は、我々の存在を認識出来るまでに発展している世界であり、これらを踏まえ、この世界を《地祖》となりえる最有力候補として、重点的な観察を行う事とする。

操縦者とそれに付随する人物に探査プログラムを送り込み、適格するか否かを判断せよ。』

『了解した。』

必要最低限の事のみしゃべり皆の了承を確認すると、一段と輝く光はまた輝きを増してから、瞬間に消え失せる。

それを確認し他の光の玉も次々に消え去り、何も無い白の空間へ戻った。

≡≡≡

『ごめんなさい碓君、私もう行かなきゃ。』

『行くってどこにだよ、綾波?』

『.....』

『おい!綾波!!--』

『...さようなら。』

『あ...綾波ツ...!!綾波いいい!!!--!!!--』

「綾波ツ!!--」

突然の発狂。

シンジは自らの叫び声で覚醒した。

辺りを見回す。

自分以外に何も無い部屋。

とりあえずここが夢の中ではない事を、手を開いたり握ったりして、

感覚があることを確かめることで証明する。

「……現実、か。」

シンジは胸を撫で下ろした。

天井を見上げる。

知らない天井…ではない、以前も一度見ている。

(またここか…。)

「もう、うんざりだ。」

そう言っつて、毛布を身体に巻き付けて身体をちぢこませるシンジ。丸めた背中が、ふさぎ込む彼を象徴するかのような小ささだ。

「そんなところで小さくなっても、何も変わらないぞ。」

突然声が聞こえた。

シンジは毛布から首だけ出して、扉の方を見る。

声の主は加持リョウジだった。

この人はいつも突然現れる。

神出鬼没が彼の基本的なスキルなのだ、きっと。

そんな事はいつもの事と、シンジは心の中で軽く受け流す。

「どうしたんですか、加持さん？」

「君を見舞いに來たのさ。

ほら、お土産だ。」

そう言つて加持はシンジに季節はずれの（この世界の日本に四季は無く、夏だけなのだが。）小ぶりのスイカを見せた。

そしてベッドの近くの椅子に腰掛けて、スイカを切り分けていく。

「シンジ君は、スイカは食べたことあるかい？」

「いえ、食べた事ないです。」

スイカを切り分けながらシンジに問い掛ける。
果物ナイフを持って作業する加持の様子を見ると、主夫でもいけるんじゃないかと思うくらいに様になっている。

料理の出来る男はカッコいい。

今まで自分で料理を作っていたので、シンジはそんな事など微塵も感じなかったが、言われてみれば確かにそうだとも思った。

「そうか、君たちは食べたことが無いのか。
じゃあ、美味いから食つて見な。」

「…んぐ…！…！…」

加持はシンジの口のなかに一切れのスイカを無理矢理押し込む。シンジも口に入れられた瞬間、驚いた表情を浮かべたが、口の中に甘さとみずみずしさが広がると、シンジの驚き顔のニュアンスが変わっていく。

「…おいしい。」

すぐ甘くて、みずみずしくて、不思議な感じです。」

「そうだろ。」

実はそのスイカ、オレが育てたんだぞ。」

「これを、加持さんがですか？」

「ああ、そうだ。」

シンジはまた別の驚きの顔を見せる。

それにしても、今日は目を覚ましてからいったい何回驚いているのだろうか。

まあいいや、そんな事はどうでもいい、美味しいから。」

「何かを育てるってのはいいぞ。」

育てていると、楽しいこともいっぱいあるからなあ。」

シンジに構わず、自分の世界に入って語り出す加持。

そんな加持に対して、シンジは疑問をぶつける。

「ってことは、辛いこともたくさんあるんですよね？」

思わず浮かぶネガティブな発想。

そしてシンジはうつむいたまま固まる。

加持は無精ひげを右手でいじっている。

何とも言えない空気が場を支配していた。

そんな中、やっぱりそうだよな、とシンジは心の中で呟いていた。

「…辛いのは嫌いかい？」

加持が口を開く。

先程とはうってかわって、穏やかで柔らかい声で話しかける。
それを聞いたシンジの表情は曇り顔。

「そりゃ好きじゃないですよ、そんな事。」

シンジの表情がどんどん曇っていく。

そしてまた、沈黙。

確かに加持さんがぼくを気に掛けてくれるのはありがたい。

NERVに入って、大人の身勝手な言い分ばかりを押しつけられて、
それに抗うすべを知らないぼくを助けてくれたりもした。

だからぼくにとってはこの上なくありがたい人だ。

だけど…

ありがたいと思っっているからこそ、この場を今すぐに離れたいなどとはシンジは言えなかった。

ぼくのためと思って口に出すその言葉は、今はとても不快にしか感じないからなどとは言えなかった。

「だけど辛いことを乗り越えていかなければ…」

やめてくれ、もう聞きたくない。

無意識のうちにシンジの顔が引きつる。

「人類を背負うという重圧は堪え難いものかもしれない。だが君は」

「止めて下さい。」

もう我慢の限界だ。

加持の話を遮ってシンジが口を開く。

加持はひげをいじくっていた右手を止めて、口に当ててシンジを見る。

「やっぱり加持さんも同じなんですね。

自分たちの身勝手な言い分ばかり押しつけて、ぼくの気持ちなんてこれっぽっちも分かるうとしないで…！」

正常な状況判断の付かない今の自分でも分かる。
自分がどんなにひどい事を加持さんに言っているのかが。

「こんなつらい思いをぼくだけにさせておいて、それで自分たちの事しか言わないで…」

加持さんだけは分かってくれていたと思っていたのに!!」

言ってしまった。

自分から突き放してしまった。

数秒ほどの沈黙の後、シンジの心を罪悪感が襲う。

おそろおそろ加持を覗くようにして見ると、加持は真剣な面持ちでいた。

そして加持は口に当てた手を外して、ゆっくりとしゃべりだした。

「シンジ君、君は自分だけが辛い思いをしていると思いつ込んでいたが、それはとんでもない勘違いだ。」

なんだよそれ。

私たち大人も、子供に未来を託す事しか出来なくて心が辛いとも言いたいのだよ。

一度収めたはずの怒りがまた込み上げてくる。

ひどく胃がムカムカする。

しかし加持はそんなシンジの心情を察しているかのように、

「言っておくが、オレたち大人の話じゃない。君と同じくらいの子供たちが、重苦をせおっていきっている。それを言いたかったんだ。」

この人はぼくの心が読めるのかと冷や汗をかくシンジ。

それより、ぼくと同じく辛い思いをしている子供たちとはどこの誰なのか。

まさかルワンダの難民キャンプにいる子供の事か？

でも、たとえそれが答えでもぼくは納得しない。

得体の知れないものと戦ってるぼくとは全然違う境遇じゃないか。

シンジは口には出さないものの、頭の中で加持に反抗する次なる一手を考えていた。

そして、加持の一手。

「NERV本部第一発令所D-1ブロックの特待室だ。」

加持の突然の、意図の分からない一手。

ここまでセオリー通りに進んできた流れを断ち切られて、手の詰まるシンジ。

加持はシンジの一手を待つことなく（それは反則では…？）、次の一手を指す。

「シンジ君、今からそこに行くんだ。
確か部屋番は…いや、行けばどの部屋に入れば良いのかくらい分か
るだろう。」

さらに訳の分からない一手が繰り出された。

どうしてですかと突っ込みたかったが、言ったところで『行けば分
かる。』と言われるのがオチだとシンジは判断し、はいと言って頷
きベッドから出る。

患者服を脱ぎ、自分の服を着て、重たそうに足を動かしてドアに向
かう。

振り返ると、加持はシンジを見て、うつすらと微笑んでいた。
とても暖かい笑顔だった…

そしてシンジはこの後、なぜそこに向かわされたのかを、驚愕の事
実と共に知る事となる。

第8話・何も、知らない〜unknow〜（前書き）

遅くなってすいません。

やっと話の展開がラブコメってきました。

第8話・何も、識らない〜unknown〜

「この区域…かな？」

加持さんの言っていた場所に着いたはいいが…

「地図くらい書いてくださいよ…。」

どうやらシンジは目的地に着くまでに迷ったらしい。

この区域はNERVでも上層部の人しか入る事の出来ない場所である。

その証拠に、シンジは加持からその区域への出入りするために彼のNERVカードを渡された。

その区域は他の区域より機密レベルは高くないから、アイスキャンや監視カメラは設置されていないと加持さんは説明していたが…

何のこっちゃさっぱり分からない。

分かる必要も無いか、どうせぼくには関係のない事だし。

まあ、ようやくこれで加持さんの真意が分かる。

本当に何考えてるか分からない人だと呟きながら、シンジは部屋の前の表札を一つ一つ確認して奥へ歩いていく。

そして見つけた。

本当に、加持さんの言う通り一目で分かった。

綾波レイと書かれた紙の入った表札。

まさかこんな所で綾波の名前を見かけようとは思ってもみなかった。

インターホンを押すのがためらわれる。

でも、ぼくの訪れるべき部屋はここだ。

シンジは服のシワを伸ばしたりして、簡単な身繕いをしてから、インターホンを押す。

「はい…？」

か弱い声が聞こえた。

目の前のスライドドアが勢いよく開く。

そこに見えたのは蒼い髪をボサボサにし、虚ろな目をした綾波だった。

「や、やあ、綾波…。」

シンジは上ずり気味の声で綾波に挨拶する。

緊張で口が乾く。

何か言わなくちゃ。

……

…が、その後が続かない。

（うっわー、どどどどどじよじよ。。。
何か喋らないと。。。）

シンジは頭を掻いたり服の裾をいじったりしてそわそわしている。

そして、挙動不審なシンジを目の前にした綾波はただただ驚いていた。

（今私の目の前にいるのは碇君。

それは紛れもない事実。

でも…どうして？）

こちらにも、疑問やら何やらがごっちゃになって慌てふためいていた。

「……………」

「……………」

無言、そして動かない。

ただの屍のようだ（いや、そんな事は無いが…）。

この時シンジはふと、リツコの一言を思いだした。

『ATフィールドの内部というものは、他の空間からは隔絶されています。』

その隔絶された空間とその他の空間との位相空間がATフィールドなのよ。』

その時は何のこっちゃさっぱり分からなかったが。

ああ、そういう事か。

つまり、ぼくと綾波のいる空間と、その他の空間との境がATフィールドなんだ…

シンジはこの時初めてATフィールドの意味が少し理解できたような気がした。

って、そんな事はどーでもいい。

早くこの状況をどうにかしなければ。

気を取り直してシンジは勇気を振り絞り、渾身の一撃を放つ。

「あの、綾な」

「せ、せっかく来たんだし、は、話したい事があるから！」

刹那の一撃がレイから放たれる。

シンジは玉砕覚悟であの一撃を放っていたため、避ける事が出来ない。

そして、レイの鋭い一撃はシンジの胸にクロスカウンターとなって直撃。

「……………はい。」

某ボクシングマンガのキザなカウンター使いもびつくりの芸術的な言葉の十字架が描きだされた。

もちろんシンジはKO負け。

ここで敗者の一言。

ま、まさか自分が言おうとした事をあのタイミングで言われるなんて…

自爆覚悟のシンジは、カウンターによる2倍のダメージを食らうとは思っていなかったため、より一層衝撃が強く感じたのは言うまでもない。

そのシンジを見事にKOした勝者は、先程から何故かそわそわしている。

そして、ぼそりと一言。

「びつくりした…。」

確かに碇君の突然の呼び掛けに驚いたって事もあるけど。

その後私は何て事を言ってしまったのだらう。

とっさに口走っちゃった一言が今になって恥ずかしく思えてきた…

そんなレイの顔は食べ頃のリンゴのように赤く染まっていた。

紅潮ぶりがよく分かるのは、彼女の蒼髪との、色のコントラストからだらうか。

おもむろに胸の辺りに手を当てると、まだ心臓がドキドキしていた。

（何…この不思議な感じは？

何かもやもやするようない…。）

この後シンジとの小一時間の会話に興じるが、レイは心ここにあらずという感じでトークを続けていた。

そんな事を知る由もないシンジは、女の子の部屋で二人きりで話しているという降って湧いたこの状況に、『加持さん、何かありがとうございます。』と心の中で感謝していたとか。

時計の針は午後5時を指していた。

窓の無いこの部屋では自然の変化を身体で感じ取る事が出来ない故、どれだけ時間が経過したかが分かりにくい。

それにしても、よく話したものだ。

かれこれ2時間近く話している。

それと、綾波は普段笑顔を滅多に見せないのに、今日は終始にこやかでいることも驚きだ。

それにしても、綾波の笑顔はかわいい…

（笑顔……？）

この時シンジは違和感を感じた。

何と言っているのだろうか。

上手く言い表わせないけれども…

シンジは普段はグズで鈍臭くてバカ（アスカ談）だが、スイッチが入ると突如として、いつもの鈍臭さをひっくり返したような鋭い勘が働く（アスカ談）ヤツである。

この時も例外ではない。

違和感と言う因子が、張り巡らしたシンジの脳内ネットワークに次々と引っ掛かっていく。

その因子は明確なシンジに一つの明確な疑問をもたらした。

何でこれに気付かなかったのだろうか。

それ以前に、こんな事は勘が働かなくても気付く事だろうに。

その疑問を、シンジははつきりと言葉に出す。

それが地雷だとも知らずに…

「あのさ…綾波はどうしてこんな所にいるの？」

言ってしまった。

何のためらいもなくだ。

その言葉を聞いた瞬間、レイの表情が硬くなった。

「……………」

レイは長く沈黙を続ける。

ただ、普段話していて起こる沈黙よりもいくぶんか長い。

普段は『喋らない』のに対し、今は上手く『喋れない』ようだった。

そしてようやく、レイが苦し紛れの一言を口にする。

「じ…じゃあ、碓君はどうしてここにいるのかな？」

「NERVの研究に関わってるって前に言ったけど、その通りだよ。」

「へえ」……………。

シンジへの逆尋問、終了。

会話時間は約10秒。

どうして私は会話がこうも続かないんだろうと、自分の口下手を呪いたくなるくらい見事な一問一答である。

「……………」

ほら、また会話が途絶えた。

まあ、彼がこの空気で積極的に話しかけてくるわけもないし。

多分このまま沈黙を続ければ、シンジの性格の事だ。

きっと深入りしないのは確かだろう。

それでも、この沈黙を守るのは忍びないと思えるのも事実だった。
伏せていた視線をゆっくり上げれば、シンジが無垢な表情でこちら
を見ている。

(別に全てを話す必要は無いから...)

レイは自分に言い聞かせた。
大丈夫、と。

「碓君、あのね…
私たち、ロボットに乗ってるの。」

「え？」

「…ジース。
私はジースのパイロットに選ばれたの。」

いくらなんでもと思うくらい唐突に、衝撃の事実が明らかにされた。
シンジは呆然としている。
もしアニメならば、シンジの頭上には大量の疑問符、もしくはトン
ボが尾を引いて飛び交っていることだろう。

どうやらレイの説明能力のなさは、口下手加減に並んで一級品のよ
うだ。

そして、もちろんシンジが疑問を持たないはずがない。

ロボット？

パイロット???

ジース???

綾波が何を言っているのかが全く分からない。

ってかこんな唐突な会話で理解できる人はいるのか!?

そう思いつつもシンジは自分の記憶の中から、レイからもらった数少ないヒントを手がかりに、最もそれらしい記憶を探していく。

(エヴァ…じゃないよね。

って事は、ぼくの知らないロボットを父さんはまだ隠しているのかな?)

その時シンジの記憶の片隅にかすかな『疑惑』が浮かんだ。

…いや、思い当たる節はある。

ロボットだと綾波が言ったのを聞いて、最初はエヴァンゲリオンパイロットに選ばれたかと思った。

しかし綾波は『ジース』のパイロットと言った。
という事は…

あの黒い怪獣？

積層された装甲のようなもの。

攻撃手段は見たかぎり殴る蹴るの物理攻撃のみ。

アニメで見るようなものには程遠いものだったが、ロボットに見えないこともなかった。

（あれか？）

あの巨大な黒い怪獣の事なのか…？）

何かの冗談だと思いたい。信じたくないという思いで、綾波を見つめるシンジ。

だけれども、レイの紅い瞳は冗談や嘘を許さない、まっすぐな瞳をしている。

「そんな…綾波が、どうして…。」

ぼくはみんなを守りたくて、エヴァンゲリオンに乗る事を決めた。それなのに…

悔しさというか、やるせなさというか分からないけれども、何となく淀んだ感情が胸の奥から沸き上がってくる。

その感情はシンジの無垢な表情すら歪めてしまうほどだ。

「碇君？」

レイは憂色をただよわせている。

ぼくを心配してくれているのかな。

「碇君、大丈夫？」

ありがとう、心配なんてしてくれて。

「うん、大丈夫。」

シンジは精一杯の微笑みをレイに向ける。

しかし、どこかきこえない。

レイもシンジのきこえない笑顔を見て、無理をしているのだと感じたらしく、まだ不安げな面持ちでいた。

この時シンジは、この一連のやりとりの中で、2つの推論をたてる。

まず、当事者であろうレイは恨むべきでないという事。

そしてもう一つ。

父さん、碇ゲンドウが関与していて、裏で糸を引いているだろうという事。

先程、彼は『推論』をたてた、と言ったが違う。

1つ目はもちろん、2つ目もほぼ確定的とシンジは考えているようだった。

(そう考えれば全てつじつまが合うんだ。

まさか父さん、あんなデカブツまで管理してたなんて…)

そうか、このやるせない感情は父さんの傍若無人さが頭に浮かんだからか。

シンジは父に対して怒る気持ちすら持てなかった。

あるのは諦めと呆れの感情のみだった。

「じゅん。」

自然と謝罪の言葉が口に出る。

「どうして碓君が謝るの？」

レイは不思議そうに首をかしげている。

それもそうだろう。

おそらく面識のあったとされるいかついオッサンがぼくの父さんで、その父さんが横行闊歩して今の状況に至っているなんて、綾波は知る由もないのだから。

それでも謝っておかないとこっちとしては気分が良くないんだよ。

「いや、ぼくの父さんが綾波に無理強いをしようになってると思うたから…」

「…びじくじいじやっ。」

「…へ？」

シンジは素っ頓狂な声を上げた。

「どうやら二人の間には齟齬>そごくが発生しているらしい。」

「それは分かるのだが…」

「果たしてどこから食い違いが発生したのか。」

綾波はさっきから怪訝な顔をしてぼくを見ているし、これは詳しく説明せざるをえない。

「えーと、だから…」

綾波は碇ゲンドウって人には会った…よね？」

「ええ、会ったわ。」

「で、その父さんが多分綾波にその…ええと、ジースに乗れって言ったんじゃないかなあって思って代わりに謝っただけ…」

拙いながらも謝罪の真意を事一通り説明する。

レイは頭を伏せて少し考えこんだものの、シンジが何を言いたいのか、大方は理解できたようだ。

「そうなの。」

でも、あなたのお父さんが乗れって言ったんじゃないわ。」

レイは、先程の訝しげな表情を一変させ、暗く沈んだ表情を見せる。なぜか彼女の紅い双鉾は曇り、かすかに潤んでいた。

「…私たちが自分で乗る事を決めたのよ。」

その後レイは臨海学校であった出来事から、《高檣》との戦闘までを語った。

友達がたくさん出来たこと、カヲルに出会ったこと、眼鏡のおじさんと《蜘蛛》との戦い…

語れる事を語れるだけ、堪えていた事を吐き出していった。

ただ、戦闘後のパイロットの運命までは…
どうしても口に出すことが出来ない。

「…でね、そのロボットのオーラ、みたいなものに飲み込まれた敵が自分で崩れ落ちて、何とか私たちが勝ったの。」

「そ、そうなんだ。」

「そう、それでね…ワク君が…。」

堰が切れたかのようにしゃべっていたレイが、突然口ごもる。

ワク君。 和久隆

そのワードが爆弾となったのだ。

レイが自ら築き上げた感情の堰を粉々に砕く…

「それでね…う、ええと…。」

先程の『自らギアースに乗ることを決めた』発言の時から芳しくな

かった表情が、今になってどんどん辛くなっていく。

「綾波？」

「な、何でもない。」

レイはとっさに笑顔をつくろうとするが、目が、頬が、眉間が言うことを聞かない。

「ねえ、どこか辛いのか？」

シンジは辛そうなレイを見て案ずるが、

「大丈夫…よ。」

そう言ってレイは顔を伏せてシンジと目を合わせようとしなない。シンジが覗き込むと、無言で顔をそむけた。

「どうしたのさ、綾波？」

シンジも不安げな面持ちになる。

シンジはゆっくりと椅子から立ってレイの横に行き、もう一度顔を覗くと、

ポタッ、ポタッ

レイの目からは大粒の涙が落ちていた。

「綾波!？」

レイは込み上げる涙を堪えるように口を引き結ぶが、それを越えて嗚咽が洩れる。

そしてレイの口から出た言葉はとても辛いものだった。

「死にたくない…。」

死にたくない

それはシンジがどこかで聞いた言葉と同じだった。そう、彼がエヴァンゲリオンの中で聞いた叫びと。

「いやだ…やだよう……死にたく、ない…よ。」

普段の冷静なレイからは考えられない、子供のような泣きじゃくり方。

顔も涙と鼻水でぐしょ濡れ。

蒼髪はうつむいた事で、力なく垂れさがっている。

「助けて…よ、助けて……」

とても聞くに堪えない慟哭が聞こえる。

辛そうな綾波の様子を見て、胸が締め付けられる。そして、ぼくはただ呆然として立ち尽くしているだけ。

逃げたい。

すぐにこの場から離れたい。

ぼくにはどうすることも出来ないから。

シンジは昔から、辛いことがあると自身の辛い気持ちを心の奥底にしまい込み、嫌なことからよく逃げていた。

この時も例外ではない。

泣きわめくレイが、昔父に見捨てられて泣いている、子供の頃の自分を思い出させたため、辛い気持ちになった。

だからこの場から早く立ち去りたかった。

しかしそんな感情を強く抑え込む別の感情が一つ。

それはある意味シンジの中で、最もシンジらしくない感情。

言い表わすなら、男気。

同情や憐れみでもないそれは、自己逃避的な感情をいとも簡単に破り、シンジの思いの矛先をレイへと向ける。

そしてシンジはレイを目の前にして、自問自答を繰り返した。

ぼくは何のためにエヴァに乗ったのか

助けたい、守りたい人がいるから。

そんな事をして何の得がある

分からない。分からないけど…
目の前に怯え震えている人を放っておく事が出来ないから…？

自分自身を犠牲にしてまでもか

この前まででも、自分自身は犠牲になっていたんだ。
今さら確認する事でもない。

守り切れるか

…守り抜いてみせる。

決意は固まった。
もう迷わない。

ぼくはエヴァンゲリオンに乗る。
父さんやリツコさんの為に乗るのではない。

友達 アスカやトウジやケンスケを守るため。

そして、目の前で震えるか弱き少女、綾波レイ 彼女を助けるため…
シンジはレイのもとに近寄り、柔らかな羽で包み込むようにそっと、
後ろから抱きついた。

レイはシンジの暖かさに安心感を覚えた。
その暖かさは、心の壁をいとも簡単に取り去る。

「うあ……………うわあああああああ！！！！！！」

涙がとまらない。

喜び、悲しみ、恐怖、孤独。

今まで我慢していた気持ちが濁流のように押し寄せてくる。

（だけど、碇君。

あなたなら私の想いまで全て受け入れてくれる、そんな気がする。）

だから…

だから私は強くなろう。

1人では無理かもしれないけど、2人なら強くなれる。

強く、生きよう。

第9話：小さな、変化〜mind〜

ぼくは夢を見ていた。

ぼくは暗い、何も無い空間にただ一人たたずんでいた。

突然、目の前に窓が開いた。

そこに映し出されたのは忌まわしい過去の記憶。

『ほらあの子…。』

母親がお亡くなりになって、父親はどこかに逃亡していて、今はたった一人で暮らしてるんですって』

『まあ、可愛いそう。』

まだ小学校1年なのよ。』

『酷い親もいたもんね…。』

近所のおばさんたちがぼくの父さんの悪業を話の種にして、ぼくを憐れむような目で見てくる。

いやだ、そんな所見たくない。

そして、窓に映る光景が移り変わる。

その背景には、紫色のフォルムと角のようなものが目立つ、見覚えのあるロボットが見える。

『シンジ、これに乗って戦うんだ。』

そ…そんなの無理だよ！

それに、どうしてぼくなんだよ！！

『他の人には無理だからだ。』

……………。

『ぐずぐずしている暇はない。

早くエヴァンゲリオンに乗れ。

でなければ、帰れ！』

父さん、碇ゲンドウだ。

これは…2週間ほど前の事だったか

確かこの後リツコさんが来て『大切な人を守るため』と、半ば強引に諭されて、エヴァンゲリオンに乗ることになったんだ。

やめてくれ、こんな光景を見せてくれるな。

気分が悪い。

そしてまた窓の映像が切り替わる。

今度は自分がエヴァンゲリオンに乗って、人型の、お面のような白と黒の無機質な顔を持つ、使徒と呼ばれるものと戦っている場面だ。

これは…

無意識の記憶なのだろうか。

全く記憶にない。

『シンクログラフ反転！』

回路が遮断されていきます!!!』

『パイロットと初号機のシンクロをカット。
エントリープラグ強制射出、急いで!』

『だめです。』

信号を受信しません!

初号機、完全に沈黙!!!』

『なんですって!?!』

…と、とりあえず自分がピンチらしかった事は分かった。

そうか、痛みで昏倒している間、こんな事になってたんだ。

今更ながら、よく生きていたと思う。

この時意識が朦朧とするまでは、ここで死んでもそれだけの人生だったんだ、と割り切って考えていた事を覚えている。
生き永らえたいとは、あまり思わなかった。

それは、エヴァンゲリオンに乗っている限り、心の片隅にでも留めておかなければならない思考だとおもっていたのだが。

だけど、なぜだろう。

今は死にたくない、と強く思う。

そこには『死』が近くにあっても、とてつもなく遠い存在であると思っ込んでいる自分がある。

(どうしてだろう?)

そう考えていると突然、右手にほのかな温かさが感じられた。思わず振り返ってみると、そこには笑みを浮かべたレイがいた。

そうだ、思い出した。

ぼくには守るべき人がいるんだ。

死ぬ事は出来ない。

生きて、大切な人を守ることだけ考えていなくてはいけないんだ。

そう思い直したシンジは、レイに向けて微笑みをかえした。

しかし、シンジの意志でシンジ自身を統率出来るのはここまでだった。

『綾波、いや…レイ。』

ぼくはレイの事が好きなんだ。』

え？

おい、何言っちゃってんの、自分？

『……………私もよ。』

どうしてあっさりと受け入れちゃってるのさ、綾波！

…って、まあ嬉しいけど…さ。

…っじゃなくて、何赤面してるんだよ！

『レイ……。』

『シンジ君……。』

何で抱き合ってるんだよ！！

くそう、思い通りに動け！！

動け動け動け動け動け動け動け！！！！

…頼むよ、動いてよ……

お願いだから、動いてよ！！！！！！！！

……………

シリシリシリシリシリ！！！！！！

「うわッ！」

けたたましい目覚まし時計のベルの音に驚き、シンジはあわてて身体を起こす。

「……………？」

だから、最初に断っておいたではないか。
『シンジは夢を見ていた』と。

もちろんレイとシンジの『甘いムード』も夢である。

我ながら何て頭の悪い夢を見てしまったんだろうと、恥ずかしくなるシンジ。

とりあえず状況が飲み込めないので、辺りを見回して状況確認をする。

(どこかで見覚えが…)。

今いる部屋にそこはかとなない既視感を覚えたシンジは、眠りに入る前の最も新しい記憶をたどってみた。

(ま、まさか…)

よく分からないが、嫌な予感がする。

シンジはその記憶を正確なものにするために『ある人』を探そうとベッドから立ち上がるうとした。

その時だった。

ムニユッ、

突然の、柔らかく温かい感触。

「…??.?」

目線を自分の手のある場所から上げてみれば、シーツにくるまれて
いる『何か』がある。

まずい、これはまずい。

先程の予感が現実になるうとしてしている。
とりあえずここから離れよう。

こ、これは逃げるんじゃないぞ、戦略的撤退だ。

わけの分からない弁解を脳内補完し終わった所で、シンジは毛布を
まくり、足をベッドの外に出して、この場から逃走しようとした。

無理だった。

シンジの腕は、シーツにくるまった『何か』から伸びる手によって、
すでに自由を失っていた。

もちろんこの状態では逃走は出来ない。

シンジは仕方なく、もう一度ベッドに腰掛けて、自分の自由を制限
する指を、一本一本丁寧に、目を覚まさないようにそつと外してい
く。

その様はまるで爆弾を処理している爆弾処理班のようである。

ゆっくり、

ゆっくりと、

慎重に…

………

かといって黙ってるのも怪しいし…
どうしよう?」

「碇君?」

「あえ!?!」

あ、いや…

別に何もやってない……」

「何かしたの??」

…!?!!

しまった、やってしまった。

思わず飛び出した間抜けな一言。

それは今までの出来事を脳内で整理し、それを踏まえた弁解の言葉の模索に集中しすぎたために起きた失態。

バツ悪く感じたシンジはアハハと笑いごまかそうとするが、時既に遅し。

「あは、あははははは……」

ごまかしきれぬはずもない。

はあ、とため息をついてシンジはうなだれるしかなく…

「ごめん…。」

ただただ、謝罪の言葉を口にした。

この時レイは、シンジが何に対して『ごめん』と言ったかは分からなかった。

しかし彼女は気付いていた。

彼は、私にひどい事をしたと勝手に思い込んで、負い目を感じているという事を。

「いいの、碓君。

私は大丈夫だから。」

だから、気にしなくてもいい。

私は碓君を信じているから。

その思いを分かってもらいたいと言わんばかりに、シンジに近づき身体を寄り添わせた。

シンジは一瞬何が起こったのか理解が出来なかったが、レイの穏やかで優しい表情を見てこちらも表情をほころばせる。

ありがとう。

どういたしまして。

互いに一言つつ言葉を交わして、彼らは微笑みあった。

＝
＝
＝

暗い倉庫のような場所に見慣れない組み合わせの3人が入ってきた。

碇ゲンドウ、冬月コウゾウ、そして渚カヲル。

ゲンドウ、冬月は黒いスーツを着て、カヲルは中学生にはおあつらえ向きのボーイッシュな私服。

そしてカヲルは2人に挟まれるようにして歩いてくる。

この状況、端から見て誘拐犯2人とさらわれた子供のように見えてしまうのは、カヲルの脇を固める2人の威厳、もとい重苦しいオーラの為せる業だろう。

その2人は、今日も他人を絶賛威圧中だった。

「お、おはようございます、司令！」

「司令、副司令、おはようございます。」

「…ああ。」

まるで属国の民が、訪問してきた専制君主の王を迎えるが如き待遇。改めてゲンドウの統率力の高さがうかがえる。

「それで、サンプルはどこにあるのだね？」

冬月が近くにいた若い職員に声をかける。

彼は、こちらですと言つて3人を建物のさらに奥へと案内した。

重機や鉄骨、土嚢などが所狭しと並ぶ通路を抜けていくと、ただ広い空間に出た。

職員は、こちらにございますと言つてその部屋のさらに奥の方向を指し示し、一礼をして元来た通路を戻つていく。

その先には、10メートルはあろうかという巨大な紅い球があつた。

「これがそうかね？」

「はい、そうです。

上手く切り取るのになかなか苦労しましたよ。」

「うむ、サンプルとしてはこれ以上無く良い状態だ。」

ゲンドウは、紅い球に近づき、触つたり、叩いたり、覗きこんでみたりと、珍しいものを見かけてはしゃぐ子供のように振る舞う。

「しかしいいのかね。」

死海文書に記されている通りに使徒の殲滅を行わなくても？」

「構わない。」

そう言つて、持っていた白い手袋を両手にはめて、今度は遠巻きに紅い球を観察しながら続けて言った。

「死海文書が絶対というわけではない。

とりあえずは使徒を殲滅出来れば良いのだ。

そこまでは私たちも老人たちも同じなのだからな。」

「しかし…」

彼のテレポートの能力は使徒の殲滅以前に、老人たちにとって脅威となるものだ。

それをみすみす見逃すような奴らではあるまい。」

「凍結中の零号機にダミープラグと渚君を搭載して、擬似的に出撃させておいた。

今回の使徒殲滅に関してはダミープラグの実験的実戦登用の結果としてある。

それで問題はなかつた。」

「それならいいのだが…」

とにかくこちらは大きな爆弾を抱えたのと同義の状況だ。

一つの綻びが命取りになりかねんぞ、碇。」

「…そうだな。」

ふいにゲンドウは、カラルの方へ視線をやる。

「ところで、マルドゥック機関のファーストチルドレンの予備選出は？」

「まだ出ておらんよ。」

候補者の選出は行われているがな。

……この際だ、こちらで選出するか？」

「頼む。」

「ああ……」

冬月はポケットから手帳を取り出して、何かを書き始めた。

それは『ゼーレ』のロゴが入った一年間のカレンダー付きのもの。

しかしその手帳は『ある日』を境にして、日付が記入されていない。
ただの欠陥商品なのか、それとも…

「約束の日への道が繋がった。

ここからだ……」

第10話：掌の上の虚像（void）（前書き）

遅くなりました。

さすが師走ですね、そこから中走り回っております。

第10話：掌の上の虚像〈void〉

とりあえず今日も1日頑張ろうと思った。

■■■■

「シンちゃん、どうしたの？」

ほっぺに紅葉が咲いてるわよ。」

「まあ、いろいろありまして…。」

恥ずかしげにうなだれているシンジを見て、突然ミサトはニマアと笑う。

「アスカちゃんでしょ!？」

「え？」

あの…何で分かるんですか？」

そんな事、アナタの態度を見てれば分かるわよと言いたいところだったが、そこは抑えて、シンジに一言。

「女のカンよ」

「はあ……?。」

葛城ミサト、他人の色恋沙汰には敏感である。
これも独身だからこそ成せる業なのか。

もちろんそんな事を聞こうとするヤツは…いない。

「それにしても、よくアスカの事覚えてましたね。
2回ぐらい会っただけじゃないですか?。」

「そうね。」

そう言っつてミサトは、先ほどと同じような不敵な笑みを浮かべてシ
ンジの方を向く。

もちろん、先刻のやりとりからしても、この状況が芳しくないこと
は彼も分かっていた。
かといって文句をつけるのも面倒なので、嵐が過ぎるまで待つこと
にする。

「まあ、お部屋でアスカちゃんと夫婦ゲンカしてるところ見せつけ
られちゃねえ。」

「あ、あれは…その……。」

「ん?…?。」

「あ、あれはアスカがハンバーグ食べたと言って……そ、それで勝手にウチにあがってきただけですよ！」

「本当に、それだけなの……?」

こ、これはダメだ。

ミサトさん台風の暴風域は依然として僕を巻き込み続けているらしい。

もうこうなるとどうしようもない。

ミサトはこの状態になると、いくら口で説明しても無駄であることは分かっている。

だから隙あらば、あわよくばこのまま逃げ仰せたいと思っていたのだが。

どうやらそれも無理みたいだ。

「アンタ人の事言える立場じゃないでしょーが!」

「へ?」

バチイッツ!!

聞き慣れた怒号と同時に、NERV本部への連絡通路に重々しい炸裂音が響く。

そして、崩れ落ちるシンジが微かな視線の先に見たのは、ひるがえ
るブロンドのツインターールのシルエツト。
答えはすぐに導き出せた。

「つつ痛うう！」

「つてかアスカ、いつからいたの!？」

「はあ!？」

「アンタ私が入っている事忘れてたんじゃないでしょうね!？」

「そういえばそうだった。」

「アスカは今、NERVに来ているんだった。」

現在の時刻は午前10時。

この事を知ったのは、1時間半前にさかのぼる…

シンジとレイが熱い抱擁を交わしていた時のこと。

突然、インターホンが鳴り、玄関の扉が開く音がした。

2人は抱き合わせた手を急いで解こうとしたが、足がもつれてしま
い、シンジはレイを押し倒すような形で転倒。

端からみれば明らかにまずい格好であったことは間違いない。

しかしそこに運悪く謎の侵入者が登場。

とりあえず顔を上げてその侵入者が誰であるのかを確認しようとする…

そこには鬼の形相をしたアスカが仁王立ちしていたというわけだ。

まあ、この先の展開は、シンジの頬に張り付いた紅葉とかから容易に想像がつくだろうから、敢えて語らないでおこう。

「……………」

シンジは何も言い返せないまま、微苦笑を浮かべながら後退りをしていく。

忘れていたなどと口にしてしまえば、先程の事についてもってキツく問い詰められること間違いなしだったから。

「と、ところでミサトさんはどうしてここに来たんですか？」

だから、とりあえず話を逸らしておけばいいかな。
アスカに文句を言われるだろうけど。

それに、勝機はこちらにある。

「アンタそうやって逃げ…」

「…あああああ！…もうこんな時間！！」

突如として慌て出すミサト。

今まで悶着を続けていたアス力はきょとんとしてミサトの方に振り向く。

「ケンカなんかしてる場合じゃないわ、付いてらっしゃい。

あつ、レイも来るのよ。」

「ええ、でも…」

「いいから！」

そう言ってミサトは急ぎ足で玄関に向かう。

ほらみる、ぼくの思った通りだ。

ミサトさんは時間にルーズだったり、頼まれた事を忘れて話し耽っていたりなんて事はいつもの事だから。

そりゃまあ、たまにはイラっとする時もあるけど…

だけど、それがなければミサトさんじゃない…ような気がする。

そんな、誉めているのかけなしているのか分からない気持ちに『ミサトさんだからかな…』と、シンジは呟いてみた。

ぼくたち3人は、何処へ行くのか分からないけれども、ミサトさんに付いて、薄暗い通路をひたすら歩いていく。

途中、壁に目をやれば『節電!』などと書かれた貼り紙がされていた。

人類を守ろうとする組織の財政事情がこんな状況で大丈夫なのだろうか。

まあそこは触れないでおこう。

『Aランク権限の者の同伴無しでの入室を禁ず』

ものものしい扉が目の前にある。

「覚悟しておいてね。」

ミサトさんは真剣な面持ちでぼくたち3人にそう言った。

とても端的な言葉。

でも、その言葉が何を意味しているのか、それはすぐに分かった。

アスカは何の事だか分からないという顔をしていたけれども。

ドアの横にある機械にミサトの事細かな個人情報　スリーサイズ　までも　が明記されたカードを読み込ませると、重々しい機械の

駆動音がして、ドアが開いた。

部屋の中は無機物に囲まれている感じのある通路とは違ってかわって、黒を基調としたクラシカルな雰囲気だった。

そして部屋の中央に、パイプ椅子がクラシックさを打ち壊して、奥に8脚、手前に2脚、向かい合うようにして横に並べられている。

という事は、僕たちの他にも呼ばれている人がいる。

誰が来るのか、綾波から聞いているからだいたい分かるけど、それでも面と向かいにくいものだ。

何せ死を約束された人たちなのだから。

そう思うと誰も座っていない椅子に自然に目がいった。

「シンちゃん、大丈夫？」

ただどぼくは決めたんだ、大切な人を守るために現実と向き合う事を…

「はい。」

シンジは並べられた椅子から目線を外すことなく、力強く返事をした。

ミサトもこの拳措には驚いて、感心の眼差しでシンジの背中を見つめる。

(変わったわね、シンちゃん。)

ミサトはロングヘアがふわっと浮き上がるほどの勢いで踵を返し、早足で玄関に向かい、扉を開けた。

その奥には、シンジ達と同じくらいの子供が7人。

そして誠実そうな短髪の若い男性が、NERVの制服を着慣れない様子で歩いて来た。

第一中学校の生徒である門司邦彦、モジを除いて他の子供たちは、シンジもアスカもちろん初見である。

しかしその彼らの顔は、普段の表情を知らない2人からしても憔悴していると分かるくらいのものであった。

「…レイ。」

チズはレイの姿を確認して、彼女の名前を元気なく呟く。

チズの艶やかな黒髪は、手入れをしていないのだろうか、毛先が跳ね上がりボサボサになっていた。

「おはようございます。…」

カナは控えめな声で、誰という特定の人に向けて言うのではなく挨拶をした。

彼女の可愛らしいツインテールは乱れていて、顔にはいくつかの青アザが出来ている。

おそらくウシロから暴力を受けたのだろう。

そのウシロも、割れた眼鏡を掛けて、生気の抜けた空っぽの顔をしていた。

「マコ、大丈夫？」

「うん、ありがとう。」

マコはマキに肩を支えられてやってきた。

まだ感情納まり切らないといった様子で、嗚咽を洩らしている。

顔を見れば、ここ何日間か夜通し泣き続けたのだろうか、まぶたは赤く腫れあがって目の下には隈が出来ていた。

もうきつと、今は涙がでないのだろう。

それに対して、キリエやカンジ、マキは平静を装ったために無表情に努めていた。

8人が、椅子に座った。

「誰、こいつら？」

アスカがミサトに尋ねる。

「この後説明するわ。」

とりあえずシンちゃんとアスカちゃんは向かいの2脚に座って。」

はあいと、やる気のなさそうな返事をして、アスカはしぶしぶ席に着く。

もつとも、レイがなぜ向かいの椅子に座ったかという事が、とても疑問に感じていたが、口に出すのはやめておいた。

この後、リツコ、冬月、キョウコなどのNERVの中でもかなりのお偉いさん達も集まり、最後にカヲルがどこからともなく登場して入り口が閉ざされた。

そしてミサトがごほん、と一つ咳払いをして一言。

「これより、エヴァンゲリオンパイロット及び、ジースパイロット合同報告会を始めます。」

ざわつきが一瞬にして収まり、部屋の中に静寂が訪れる。

「と言っても、顔合わせ程度のもものだから。」

だから緊張はしなくていいと、ミサトは明るい声で言う。

しかし朗々たる声とは対照的に、子供たち、特にシンジに目配せをした時の黒い瞳には憂色が浮かんでいた。

その瞳は何を伝えたかったのだろうか。

(可能性のあるぼくたちは、彼らにどう振る舞えば良いのか…)

シンジは、ミサトの憂いた瞳を見て、そんな事を思っているのだからと直感的に感じ取っていた。

でも大丈夫。

きっとみんな分かってくれる。

今はせめてでもそう思いたいね。

シンジは天井を仰ぎ見てから、もう一度ミサトに注目した。

さて、話をしっかり聞きいていなくては。

「まずこちらがジースパイロットの8人。」

右から順に、綾波レイ、門司邦彦…と、名前が呼び上げられていく。

「そしてこちらがエヴァンゲリオンパイロットの2人。」

そうそう、ぼくとアスカがエヴァのパイロット。

……って、えええ!!!?

思いがけない言葉に、思わず椅子をガタンと鳴らしてしまう。

ただ、そんな衝撃的な一言を聞きながらも、レイやアスカは身動き一つしなかった。

「み、ミサトさん。」

「どういう事ですか??」

ミサトは暗い顔をして答えない。

「どうして…どうしてアスカなん」

「そんなの分からないわよ…!!」

ミサトはシンジの言葉にかぶせるように、静かに怒鳴った。

「やめて、ミサト。」

「私が自分で決めた事だから。」

アスカはミサトを諭そうとする。

なだめる事に努める彼女を横目にキョウコの方をうかがえば、先ほどのミサトみたく、もの悲しい顔でうなだれていた。

きつところなる事は知っていたに違いない。

目が回る。

声が枯れる。

何が何だか分からない。

もつどうしたらいいのかわからなかった。

「ごめんね、シンジ。」

全くらしくない、素直な気持ちをアスカが口にする。

この時、守りたいものはまたしても、この掌から虚しく零れおちていった。

第11話：失うもの、拾うもの、struggle（前書き）

遅くなつてすいません。
とりあえず11話です。

第11話：失うもの、拾うもの、struggle

10分前。

何か思考停止を確認。

その他もろもろ頭の中からぶっ飛んだ、消え去った

あの後何を話し合っていたのだろうか。
うる覚えでしかない。

エヴァンゲリオンについてや、ジースパイロットの戦闘後に待ち
受けるものについての説明は……されていた。

アスカはその事実を聞いて、驚きと困惑の入り交じった表情だった。
そんなのかわいそう、とも呟いてもいた。

だけれどもエヴァの事についての説明…というか紹介が為されると、
身動き一つせずにミサトの話を聞いている。

どうしてそんな毅然とした態度でいられるのか。

ぼくはミサトさんの話なんかほとんど覚えていない。

それは、アスカの一挙手一投足を目で追っていたからだ。

それはもう、無意識の範疇の行動だった。

なぜ、どうしてアスカがエヴァンゲリオンに乗ることになってしまったのか　イヤだとは思わないのか　それが心に引つ掛かって…

＝
＝
＝

「別に、ママから言われたから乗るって決めただけよ。」

肩にかかったブロンドの髪を首を回して後ろにやり、広がったツインテールを指でいじりながらアスカは答えた。

「でも、何も詳しい事も聞かないで引き受けるなんて……どうし」

「アンタが出来るぐらいなんだから、私にかかればオチャノコサイサイよ!」

「それでもやっぱり痛いし大変だし……。」

「それはドジでバカなシンジだからでしょ。」

私だったらすぐにソレ、スマートに乗りこなしてみせるわよ。」

アスカは歩調を速め、手をひらつかせて白々しく言った。

そんな事ない。

シンクロとかは技術うんぬんじゃない。

シンジはそんな事を心の中で呟いていた。

だがしかし、口には出さずに置いた。

何せ今のアスカはすこぶる機嫌が悪い。

(あんな暗い話を聞いた後なんだし……当然だよな。)

それもまあ、そうだろう。

だけどそれ以前に、何か忘れてないか??

「いい加減機嫌直してよ……。」

シンジはアスカの後を追いつながら言う。

彼なりに、彼女の事を心配しての一言だったのだろう。

しかしそれは、地雷原に足を踏み入れたのと同義であるとも知らず

……とかなんとか言っつて、比喩的にシンジの置かれている状況を述べ
てきたが、端的に説明するところなる。

バッドエンド直行フラグ立ちまくり

うん、めっちゃしっくり来る。

さて、シンジの運命がどちらに分岐するのか……

そしてシンジは口を開く

「ぼくが何をしたって言うの……」

シンジは死亡フラグに直行した!!

バチイイツ!!

この展開をここ数時間で何回見ただろうか。

小気持ち良い炸裂音がフェードアウトしていくのに連動して、その中性的ですっきりした顔を歪めながら薄灰色の床に崩れ落ちる。

いい加減学習しろよ、碇シンジ……。



ぼくたちは今、第三新東京市を下目に、芦ノ湖上空に浮かんでいる。

因みに『浮かんでいる』というのは、ぼくらが乗っているモノは厳密に言えば飛行機ではないからだ。

V T O L 重戦闘機とかいう垂直離陸が可能な戦闘機を改造したもの……らしいが。

さつきコレに乗る前に、ミリタリーオタクの阿野万記、マキが得意げな顔をして説明をしていたのを聞いていただけなので、良く分からない。

ズボンの迷彩柄といい、ボーイッシュな髪型といい、女の子であることを感じさせない格好をしていることにも納得がいく。

シンジは不意にクスッと笑った。

(アイツがいたら、ものすごくマニアックな話が展開されるんだろうな……。)

因みにアイツとは、メガネとミリヲタという単語から推察して頂きたい……。

そんな事を考えつつ、米粒ぐらいに小さく見える第三新東京市の街並みを、飛行機の丸窓からぼんやりとながめていた……

＝
＝
＝

飛行機から降り立つと、しとしと、まとわりつくような雨が降っていた。

空には薄灰色の雲が、綿棒で引き延ばされたかのように、薄く平べったく浮かんでいる。

「あの……ここはどこなんです？」

「第28放置区域、旧東京よ。」

辺りを見回して見ると、高層ビルの残骸が水面から突き出している。

日本の首都、世界有数の情報都市として繁栄していた時とはえらい違いだ。

……もちろんぼくは本物を見たわけではない。
だって15年前にぼく、生まれてないからね。

教科書で15年前の東京の様子を見たから分かるだけ。

「シンちゃんたちは今からブリーフィングよ。
お腹、空いたでしょ？
コッチに来て。」

そういえば朝から何も食べてない。

ブリーフィング……何をするのかよく分からないが、とりあえず何かを食べられるようなので、ソレが何であるかは聞かずに黙って付いて行く。

後ろではカンジが、『ブリーフ』と呟いて、周りの女の子からキツい視線を浴びせられていた……

自分の思考とかぶっていた。

(思っても口には出すまい……)

間一髪だった、ような気がした。

数分歩くと、輸送車も楽に入れるくらいの地下道への入り口が現れた。

ゲートをくぐり、暗い通路を歩き、最深部にある小さな会議室に入る。

大きな長机が部屋の中央に鎮座している。

席に座ると関さんが弁当を抱えながら部屋に入ってきて、ぼくたちの前に並べていった。

「それじゃあ、食べましょ。」

そう言って、ミサトと関も席に着いた。

「……さて、まずこういう風に乗ってなんだけど、連絡事項が一つある。」

関は表情を硬くして静かな口調でしゃべりだす。

「先程の会議で上がった第三新東京市への転居の話だけど、君たちの家族は呼ぶ事は出来ない。」

君たちだけで引越してもらおう事になった。」

先程NERV本部の部屋で行われたミーティングで、子供たちは、

『黒い怪獣による街への被害を最小限に食い止めるため』

という名目で、第三新東京市への転居を言い渡されている。

その時のもっぱらの議題は『転居は一人で行うか、家族単位で行うか』であった。

しかし結局時間内に決定が出なかったのだ。

「どうして、ですか？」

少ししてモジが訝しげに尋ねた。

関は口に運ぼうとした白飯を一旦容器に戻し、お茶を飲んで口の中のモノを流し込む。

「外部に情報が洩れる心配もあるし、それに……」

関は目を伏せて、口ごもった。

「それに、きみたちは命を狙われていてもおかしくないんだ。最悪、家族を巻き込むことにもなりかねない。」

命を狙われている

それは彼らは他人から恨まれる存在であるという事。

ここまで無関心を貫いてきたばくとアスカも箸の動きを止めて、いつのまにか耳を傾けていた。

それはぼくたちエヴァパイロットとて例外ではないからだ。

『安全なんて嘘っぱち』

とか、

『人類を守ってるとは思えない』

だとか、NERVのイメージは、民間には否定的イメージで通っている。

そう、ぼくたちは『地球を守るヒーロー』なんかじゃない。

平穏無事な生活を望む者にとっては『忌々しいモノたち』にすぎないんだ。

「じゃあ、私たちは孤独に死んでいけって事？」

チズが関に冷たい視線を浴びせながら言った。

関は目を伏せたまま、口を開かない。

「私はイヤ。

私だけ一人で悲しく死んでいくなんて。

ね、みんなもそう思わない？」

そう言ってぼくたちに振ってきた。

確かに世界の、国民の、他人の最大幸福を考えるならば大人たちの意見を呑めば良い。

しかし個人の、子供たちの幸福を考えれば何があっても大人たちの

意見を呑むわけにはいかない。

だから、近い将来に確実な死を約束されている者が首肯するはずは無いだろう。

そんなはずが……

「全員は、全体の奉仕者であるべき、だから……
やらなくちゃいけないのなら、その義務は果たさなきゃ……。」「

そんなはずが、あった。

口を開いたのはマコだった。

いつも大人しく、規範を守る事を大切にしている彼女らしい返答。
それは社会に生きるぼくたちにとって一番に考えなくてはいけない事。

だから、彼女の意見は正しい。

だけど……

「じゃあ、あなたは勝手に一人で死んでいけばいい。」「

マコのいる方向に振り向きもせず、まるでうるさい八工を払いのけるかのように言い放った。

そしてチズはさらに続ける。

「どうせ私は死ぬのよ。」

あなたたちみたいに生きる可能性を持ってない。

だったら死ぬ前の私たちのささやかな願いくらい、叶えてくれたっていいじゃない。

それとも、NERVってのはそんな事も出来ないような集団なの？
？」

「そ、それは……」

「……………」

ミサトと関は何も言い返す事が出来ない。

それは、彼女が言う事もまた、正しいからだ。

相反する正しい答え。

どちらが正解かは分からない。

だから、言葉に詰まる2人に代わってマコが再度チズの見解に食らい付いた。

「じゃあそっやって家族を呼んで、もし……もし家族を失ったらどうするの？」

「そうならないように頑張るのが大人たちの仕事じゃない。」

「それは……」

で、でも、家族じゃなくなったら、私たち仲間同士で暮らせば気持ち

も紛れるかもしれないじゃない…!？」

その一言を聞いてチズは冷笑を浮かべ、嘲る。

「仲間?？」

ははっ、あなたは私をそんな風に見てたの?？」

あいにくながら私はあなたたちを仲間なんて思ってないわ。」

「…そんな…。」

「ただ、私の番までに負けないようにしてくれさえすれば、それでいい。」

その一言は、マコの怒りの琴線に触れた。

どうして、そんな事が簡単に言えるの?？」

そう思うと、無意識のうちに席を立ち、拳を握り締めて振りかぶって、チズの目の前に立っていた。

そして、振り下ろす。

振り下ろす……

振り下ろす……せない。

どうして?？」

握り締めた拳は微かに震えていた。

(まさか、人をぶつことに怯えている…???)

いいや、そんな事ない。

やるんだ、私。

そう自分の心に言い聞かせて、もう一度タメを作って振り下ろした。

「半井さん、やめなさい!!」

ミサトの制止を耳にして、またしても振り下ろしかけた拳を止める。

周りの人は皆啞然として事の成り行きを見つめていた。

しかし、敵意をむけられた張本人は無表情で「臆病者」と、マコに向かって吐き捨てた。

「……………!!」

マコは手を口に当てて、ポニーテールの髪が自分の顔にかかるくらい勢いで振り返り、部屋を出ていった。

「半井さん!!」

…関一尉……」

そう言つて関の座つていた席の方を見ると、姿が見当たらない。

ミサトが口にする前に、彼女の言いたい事を関はもう行動に移していたのだ。

こちらもすごい勢いで部屋を飛び出す。

そして、ボタン、という扉の閉まる音を境に、部屋の中は沈黙に包まれた。

その数秒後、沈黙を破り、何も聞かれてないのに、チズは弁解の言葉を口にした。

「べ、別に私は、本当の事を言つたまでよ。」

少し焦つた様子で、主にミサトに向かってそう告げる。

ぼくは気づいた。

彼女が保身に走つた事を。

この場の空気は、とても居心地が悪い。
きつと批判されるから

だから、取り繕つてその場を乗り切る。

そんな彼女の行動は、いやなことがあつたら逃げていた昔の自分に重なった。

だから、ぼくは彼女に言つてやつた……。

「君たちにどんな事があつたのか知らないけど、人を殺すなんて、そんな事だけは言つなよ。」

今までの使徒との戦闘で市民に被害を与えたぼくに、こんな事を言う資格は無いかもしれない。

「仲間なんて思つてもないなんて、そんな悲しい事言つなよ。」

大切な人は近くにいたのに、守るために強く生きることが出来なかつたぼくに、こんな事を言う資格は無いかもしれない。

だけど……

ぼくが伝えなければ。

そう思つたんだ。

「ぼくたちはどんなかたちであれ、大切な仲間なんだよ。もちろん半井摩子さんだつて、仲間……ナカマだ。」

話し終わって数秒、沈黙が続いた。

この時ぼくは、彼女、本田千鶴に何を言われても構わないという気持ちでこの言葉を口にしていただけれども。

しかし彼女は目を丸くしているだけであった。

以外だった。

どうして???

…いや、そんなの分からないか。

「だから、さ……

謝りに行った方がいいと思うよ。」

シンジそう告げると、チズは「うん」と軽く頷いて、箸をもう一度手にとって黙々と弁当を食べはじめた。

その時だった。

さあ、戦闘が始まるよ

どこからともなく、声が聞こえた。

そしてぼくたちの目の前に、銀髪をした一人の男の子が現れた。

ギアースを管理している（自称）サポート役のカヲルであったか。

さっきのミーティングでも見かけたが……美男子だ。

ってそんな事はどーでもいいと言わんばかりに、シンジは目をつむって首を振り、カヲルに尋ねた。

もうその質問の答えは分かり切っていることなのに

「戦闘…って？」

「ジアースの戦闘さ。」

君たちも来るんだよね、シンジ君??？」

第12話：半井摩子〈resolver〉（前書き）

エヴァンゲリオンクロニクル、定期購読予約しました。
散財……………。

第12話：半井摩子 resolve

私は一体何をしているのだろう。

逃げだしたって、逃げ場なんかないのに。

（そんな事、分かってる。）

分かってるけれど。

それでも思考に反して、私は違うベクトルへ駆けていく。

肩を叩いた恐怖に、振り向く事も出来ず、ただ怯えながら

薄暗い通路を走り続けて、真っ先に目に飛び込んできたのは一条の日の光だった。

息は上がって、肩で呼吸をしているが、それでも走る。

外に飛び出せば何かがある気がしたからだ。

そして狭く開いた鉄扉の間を駆け抜け、外へ飛び出す。

日の光がまぶしい。

ここ数日蛍光灯とナトリウムランプの光にさらされっぱなしだったから、いつもはシミの原因ということまでいとわしく感じる太陽光も、この時ばかりは身に染み入るのがわかった。

手をかざして空を仰ぎ見る。

雲の隙間から見える青い空。

空を優雅に舞う海鳥。

そして雲から突き出る黒い塊。

……黒い塊??

まさか……

マコは目を凝らして周囲をもう一度よく見渡した。

……見間違いじゃない。

見間違えるはずも、ない。

シルエットは見覚えのある人型。

腕は地面に擦りそうなるほど長く、足は上半身の質量に釣り合わないくらい細い。

全体が鋭角で構成され、至るところから突起物が出ている。

黒い怪獣、そう　ジアース　だ。

いやだ、認めたくない。

これはゲームだ。
ここは異世界だ。

これは夢だ。

そうであつてほしいと、私は願う。

だけど、そう思いながらも、それを確かめるためにマコは右手にゆ
つくり力を入れてみる。

「…痛。」

軽いしびれと痛みが走った。

ということは。

ゲームの中じゃない。
異世界でもない。

夢でもない。

ただ現実あるのみだった。

「現実……
つて事は死ぬんだ、私。」

右の手のひらにくつきりと付いた爪を立てた痕を見て呟く。

受け入れたくないけど。
受け入れなくちゃいけない。
この地球のために闘って、死ぬことを。

「……うっ……くっ……。」

マコの頬を涙がつつたう。

ごめんね、お母さん。

そう言っつて、マコは静かに目を閉じた。

半井摩子

■■■■

> E P I S O D E N A K A M A <

それは私がまだ保育園に通っていた時の話

その頃、保育園内で事件や事故が起きると何かにつけて私が犯人扱いされる、という事がよくあった。

どうしてそんな濡れ衣を着せられるのだろうか。
理由なんてわかるはずもない。

だけど皆は口をそろえてこう言う。

それは、私の母が売春婦なるものをやっているから、だと。

しかしまだ小さい私には、お母さんのやっている事がなぜ卑下されるのか、そんな事までは分かるはずもなく

『全く、親が親なら、子も子よね。』

そんな皮肉めいた言葉を言われる悔しさに、唇をかみしめながら耐えるしかなかった。

小学生になった。

相変わらず周囲からは冷たい目で見られる。
そればかりか、親に倣ってなのだろうか、同級生たちも『私たち』
をのしるようになった。

辛かった。

とてもとても辛かった。

お母さんがバカにされるのが。

だから私はお母さんがバカにされる理由を知ろうとした。

社会のしくみやモノの道理など、たくさんの事が分かるようになってきたし、事実を事実として受け止められる自信があったからだ。

からだを、うつる？

「そうよ。」

「それって、お母さんのからだをみんながかうんですか？」

「そういう事。」

「そ、それでお母さんはバカにされるんですか…？」

「当たり前でしょ。」

「売春婦なんていかがわしい仕事…。」

「………どんなしごと、ですか？？」

………それは自分で調べなさい

それならば、自分で調べてみよう。

目の前に座っているのが小学生であつても、だ。

感想：気持ち悪い

「げほッ!！」

キーボードに吐寫物がかかる。

あまりにグロテスクな映像を目の当たりにして、戻ってしまった。

私はまだ、現実に耐えきれなかったのだ。

「おい君、大丈夫かね!？」

初老を迎えた白髪がかった会社員風の男性が、心配そうに駆け寄る。

とりあえず弱々しいながら頷いて、大丈夫であることを伝えた。

でも、足に力が入らない。

立てない……

結局私に声を掛けてくれた男性が、用務員室に連れていって来て、私はベッドに寝かされた。

虚ろな目を開く。

「知らない天井……………」

…???????

なんだろう。

こういうシチュエーションではこう言わないといけない気がするきて……

ってかこの時私、こんな事言っただけ??

まあ、いいや。

とりあえず話を進めよう。

ボタン!!

部屋の扉が閉まって間もなく、壁越しに大人たちの会話が聞こえてきた。

「こんなモノを見てたのかね、あの子は。」

「そりゃ戻すのも当然でしょ。

刺激が強すぎますよ。」

「全く、最近の子供は……………」

「あら、最近の子供とか言ってウチの子とあの子を同列に語らないで下さる??」

「……それはどういう事だい??」

「あら、館長さん知らなかったんですか??」

「あの子、売春婦やってる半井さんの所の娘さんですよ。」

「ああ、なるほど。」

「しかしまあ、子供があのような様だということは、親はよほどなんだろうなあ。」

「子供は親を映す鏡、って言いますしね。」

子供を見れば、親の人となりも分かるってもんですよ。」

「血は争えないわねえ……。」

丸聞こえだつて。

……と言つたところで、こいつらは気にすら留めないか。

私はベッドから起き上がり、洗面所で口をすすいでからこっそり部屋を抜け出した。

外に出てみると陽はすでに傾き、深紅の光と雲の白が空のキャンパ

スを彩っていた。

涙を枯らしてしまったからだろうか。
向かい風が目染みる。

だから私は目を閉じた。

痛いのは、嫌だから。

心が痛いのも、嫌だから

私は、とぼとぼと歩きながら考える。

私にとっては、自分が罵られることよりも、お母さんが罵られることの方が辛かった。

だったら、それを回避するにはどうしたら良いのだろう。

.....

そうか、そうだ。

思い付いた。

私が真面目に、いい子にすればいいんだ。

大人たち曰く、『子供は親を映す鏡』らしいから。

でも、こんな私が真人間になれるのだろうか。

分からない、わからないけど。

それでも、お母さんの代わりになって真面目に生きて、お母さんが周りの人から立派だと思われようになりたい。

お母さんの役に立ちたい

そんな短絡的な思考が頭の中を駆け巡っていたという事を、夕日の眩しさと共に鮮明に覚えている。

今振り返れば、なんて浅はかな考えだろうと思う。

もしその時に戻れるのなら言っただけやりたい。

『もっと大切なものがあるだろう』と。

もったも、そんなことは出来るはずもないが。

だから、せめて誤解だけは生みたくない。

なので、ここで一つ補足をしておく。

決して、お母さんが立派じゃない、というわけではないということ
を。

お母さんは、仕事がああなだけで、人としてはとても素晴らしい人
だ。

ただお母さんは……もう、今からでは周りから尊敬されるような立場にはなれない、というだけなんだ。

それだけは勘違いしないでほしい。

脱線しすぎた。
話を元に戻そう。

私は大した計算や予測もしてないけど、その考えを実行に移す事を決めた。

お母さんの汚名を返上するために。

まぶたをゆっくり上げる。

頭の中をかき回すような紅く鋭い光は、さっきのそれよりも鈍く黒ずんで見えた。

……うん、大丈夫。
これならやっていける。

もちろん不安が無いわけじゃない。

でも別にためらう事もない。

私は目を大きく見開いた。

そして、代わりに感情の扉に鍵を掛けた。

そうだ、これでいい

これでいいよね??お母さん……………

第12話・半井摩子「resolver」(後書き)

マロもとい、ナカマ編

もう少し続きます。

第13話：半井摩子〜friends〜（前書き）

半井摩子、ナカマ編、終わりです。

第13話：半井摩子（friend）

私は常に模範的でなくてはいけない

それからというもの、私は普段の素行はもちろんの事、地域のボランティアに積極的に参加したり、近所の清掃活動の手伝いをしたりした。

初めてお母さんで行った清掃活動の時、お母さんは近所の方たちと和気あいあいとしやべっていた。

そういえば、町内会の行事は仕事が無いかぎり常に参加していたわけ。
だから友達も多いんだ。

誰もお母さんの事をバカにしない。
そのことだけで、私はとても嬉しかった。

時間が経ったある日のこと。

この日は、近所迷惑な異臭を放つドブ川（Sランク級）の清掃を行うことになっていた。

私とお母さんは、こつこつ汚れ掃除の時専用にと古着屋で買った、

お揃いの灰ぼけた色のジーパンとシャツを着て出かけていく。

確かにこれはひどい……

鼻をむしりとられそうな臭いだった。

ただどお母さんはそんな臭いもいとわずに、ドブ川の中へ入っていき、作業に加わった。

そして、いつものように近所の方と作業をしながら楽しそうにしゃべっている。

マコちゃんもこっちにおいでと、近所のおばさんが手招きをするが、私は行かない。

だって私は、楽しそうに話すお母さんを見ていたいから。

「すみません！こっちの方ゴミがひどいです！」

ゴミを拾う手を休めることなく、顔だけをそちらに向いてしゃべる。

そして、私も少し離れた場所で黙々と作業を続けた。

……

やけに向こうが騒がしい。

よく見るとお母さんが誰かと口論になっているようだった。

「だから、子供の教育上良くないでしょう？
同級生の子の親がそんな職業だと。」

この暑い中、上も下も黒で統一されたカラスの様な格好をした女性
がお母さんの前に立ちふさがっていた。

その傍らにはクラスの友達の小田さん　　と言っても、いつも私に
嫌味ばかり言うってくるから、友達とは思ってない　　が、新しく
出来た中国語教室の生徒カバンを脇に抱えて立っている。

という事はこっちの黒服は小田さんのお母さん。

いつも私たちに会うたびに嫌味を言ってくる厄介な人だ。

なんだ、また難癖つけにきたのか。

はあ、とため息を一つつき、私は傍観者の立ち位置につく。
面倒事や不愉快になる事は極力聞きたくないから。

「そりゃあ、私はそうかもしれませんが、学校に行っているのは娘
で、娘がちゃんとしていれば何も問題ないでしょう？？」

お母さんは、小田さんのお母さんにさわやかな、しかしどこか冷たい笑顔を向ける。

そして口調もとげとげしい。

どうやら厄介者を前にして感じていることは、私もお母さんも同じみたいだ。

「そんなのわからないでしょう？」

隠れて何をしてるか。」

「それこそお互い様じゃないですか。」

「まさか、ウチの子と一緒にしないでください。

親が、違うんですから。」

そしてこちらもお返しと言わんばかりに、見下したような目でお母さんに向かって言い放つ。

私たちには聞きなれた、でも聞きたくない言葉を。

でもこちらも、結局はそれなのか、ぐらいにしかもう思わない。

まあ、当たり前だ。

そんな言葉をいちいち気に掛けてたらきりがないから。

だからお母さんもいつものように話を軽く流して終わりにする、と思っていた。

でもその日のお母さんは……

「そりゃあそつでしようねえ。

町内会の義務も果たせない親、ですもんねえ。」

明らかに勝負腰の、嘲笑混じりの一言を投げ掛けた。

まさか、お母さんが反抗的な態度をとるなんて。

私は驚いて思いがけず目を見張った。

小田さんのお母さんとして例外ではなく、鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔をしている。

「い……忙しいのよ。

やらなくちゃいけないことがいっぱいあるのよ。」

呆気にとられて狼狽するも、すぐに元の調子に戻してみせた。

そしてこちらも負けじと反撃。

「普通の生活をしているとね、時間も自由にならないし、半井さんと違う」

「その状況を選んだのは自分じゃねえか！
それを言い訳にするんじゃないねえ！！」

突然の怒号が耳をつんざく。

そんなこと関係ない、いちいち私と自分とを比べるな。

そんなことを言っているかのような叫び。

そんな今までの怒りや無念を乗せた叫びは、心の卑しい者の他愛ない戯れ言をいとも簡単に吹き飛ばした。

周囲の人は突然の怒号に啞然としていた。

そしてそれを聞いた小田さんのお母さんは、さらに目を丸くする。

しかしその表情は次第に怒りの表情へと変わっていき、右手には力がこもっていく。

握りしめられる拳。

怒りの表情。

これはまずい。

ここまで来ると、この先にどんな展開が待ち受けているのか、鈍感な私でも予想が付いた。

だから止めようと駆けた。

でも、時すでに遅し

パシッ

私が駆け出した時にはもう、小田さんのお母さんの平手がお母さんの頬をとらえていた。

バシッ

しかしお母さんは、それよりも強く、相手の頬を張っていた。

予感的中。

周りの大人は慌てて2人に駆け寄り、取り押さえる。

だけど私は。

足がすくんで、動けない……

結局、私は何もせずに見ている事しか出来なかった。

事態はとりあえず落ち着きを見せる。

その時突然、周りの人に肩をもたれながら振り返り、お母さんは口を開いた。

「娘の教育よりも、夫の教育の方をしっかりとしろって事。だから夫に逃げられるのよ。」

なぜか勝ち誇った顔をしていた。

それに対して向こうは、歯軋りの音がこちらに聞こえてきそうなくらいに歯をかみしめている。

結局何も言い返さないまま、子供の手を引いて去って行ってしまった

「お、お母さんッ!!」

思わず情けない声をあげてお母さんのもとへ駆け寄る。

私はすぐさま尋ねた。

どうしてあんなことを言ったのか、どうして手を出したのか、と。

きつとこの時の私は、報復や責任というものが怖くて、臆病になっていたのだろう。

心配になって、お母さんのもとへ駆け寄ったのだろう。

そんな私にお母さんは

「大丈夫よ、マコちゃん。

自分で責任をとれるって自信があったから、ああしたまですよ。だから、大丈夫。」

『責任をとれる』

何とも力強い言葉。

だからお母さんは強いんだ。

嬉しかった。

頼もしかった。

だけでも……

(私は、お母さんのようにやっていけるのかな……)

その自信は持てなかった。

まだ、この時は。

≡
≡
≡

そして今私は日本を、世界を背負って、覚悟の椅子に座っている。

私は、強くなれたのかな？？

そんな事は分からない。

でも闘わなくちゃいけない。

さあ、行こう

私は覚悟を決めて、世界の『敵』に向けて拳を振り上げる。

振り上げた拳

自分で責任を取れるならそれを使っても構わない

ドカッッ

いける、出来る。

バキッ

反撃を食らう。

そんなの構わない、構うものか。

ドギヤッ

体勢を立て直してもう一度殴る。

出来る、私にも出来る。

今度は出来るよ、お母さんのように。

「私、つよくなったの…かな?？」

目に涙を浮かべ、それでも笑いながら呟く。

「頑張れ、ナカマ!!」

「ナカマ、頑張って!!」

周りを見渡せば、仲間がいる。

そのみんなが、一つになって私を応援してくれている。

それが今のマコの、いや、ナカマの『強さ』だった。

「いつまでもつ、弱いままじゃ、ないっつー!!」

バキイイイ!!

振り下ろした右腕が敵の装甲を貫いた。

すかさず左腕で周りの装甲を引き剥がし、白い球体、急所を引きずりだす。

さあ、とどめの一撃だ。

自分の心にそう言い聞かせて、私は左腕の先に灯った光を天高くに向けて放った

「おめでとう、君たちの、いや……ぼくたちの勝ちだ。」

カラルが爽やかフェイスでそう告げる。

しかしなにも嬉しくなどない。

ジアースの周囲を窓に映してみれば、兵装ビルは跡形もないほどに壊し尽くされている。

山はそれが山であった事すら分らないくらいに削り取られている。

こんな状況で、誰が喜べるものか。
この結果を招いた張本人なら、なおさらだ。

それでも……

振り上げた拳、自分で責任を取れるならそれを使っても構わな
い

それでも、私は最低限の責任は果たした。
敵を倒して、この地球を守る事で。

ただ、それ以外の責任は……私は死ぬんだから果たせない。
でもきつと、みんなが代わりにやってくれと信じている。

だってみんな仲間だもの。

こんな私でも、私、半井摩子を『ナカマ』と呼んでくれた、かけが
えの無い仲間だもの

第14話：すれ違いの記憶〜parallel〜（前書き）

更新遅くなってすみません。

そろそろピッチ上げて話進めないとなあ……

第14話：すれ違いの記憶〜parallel〜

天気は晴天。

時刻は太陽がぼくらを見下ろす12時を指している。

先日まで鬱陶しいくらいに降っていた雨も止み、住宅街では溜まった洗濯物をここぞとばかりに掲げる主婦がよく見られる。

これ以上なく清々しい一日。

ただ、彼らの向かおうとする一画を除いて……

「ジアース、か……」

男の子の夢、だよな……。」「

突然、昔の思い出に浸り、懐かしむかのように、上下黒スーツに野球帽という不恰好をした老齢の男が呟く。

……っと、よく見たら冬月だった……

今彼は、水上から黒く、武骨な上半身を覗かせてそびえ立つ塊、ジアースを目の前にしている。

さっきの一言は、これを見ての感想なのだろうか。

別にそれはいいのだが。

ただ、いい年こいたオッサンの子供じみたたわごとから話を展開させていかなくってはならないのは、何か気に食わない。

まあ、気にしないでおう。

とりあえず現状を述べると、今からジアースの調査が行われるとの事、らしい。

実は前々からカヲルとゲンドウの間で、ジアース調査の話が進められていて、今日がその実施日なのである。

そのため、今ジアースの周囲には何隻ものNERVの巡洋艦やらなんらやが、甘いものを見つけたアリのようにひしめいている。

冬月は、その調査団の監督官として参加しているのだ。

「それでは、調査を始めようか。」

帽子のつばをつまみ、深くかぶり直しながら、そう口にした

■■■■

夏の日差しは傾いて、今にも水平線の彼方へ落ち込もうとしていた。冬月は一人、生命の息吹を感じさせない赤い海の風を体に受けて、深紅の太陽を見つめながらドックにたたずんでいる。

正直絵にならない、というより、気持ち悪い。
アスカばりに、気持ち悪い。

冬月のもとへやってきた調査班の青年も、不審がっている

「調査班からの報告書です。」

「ああ。」

青年から報告書を受け取り、手近な椅子に腰掛けて資料に目を通す。

「これは我々として未知数の代物だからな……………」

【調査報告：kn ジアース】

ジアースの出現、行動に際する空間情報および『ゲーム』の構成情報（：以下、ジアースプログラムと称す）のコピーを開始。
MAGIへの移植を前提にジアースプログラムの収集を行う。

外部との電波通信、良好。

動力源不明。

空間から出現する機構、不明。

全体は外骨殻様の構造をなし、装甲とも思われる板状体が積層、それぞれが軟質体でゆるい結合をしている。

材質、不明。

サンプルの採取、不可。

積層された装甲の隙間に多数の死体を発見。
腐食は確認されず。

.....

結局のところこの調査で分かったものは、人間の力がいかに無力か
という事、
そんな風に報告書の感想欄に書き込まれていた。

「さて、どうしたものか.....」

冬月は頭を抱えた.....

====

ナカマの戦闘から1週間が経った。

シンジ達は今、何事もなかったかのように平凡な一日を送っている。

何があったのだろうか。

この平凡を目の当たりにすれば、体験した非日常が嘘だったように思えてならない。

それでも、起こった事は紛れもない真実だ。

それを証明するものだってすっかり残っている。
いま、ぼくの手の中に。

【 極秘：被害報告 】

k n ジアースの戦闘に際して……

軽症者18名、重症者7名、死者1名。

端から見れば、かなり大規模な交通事故が起きたのではないかと勘違い出来るレベルの被害のように思える。

でも違う。

これはここで何かとんでもない事が起きていた事を証明する証拠だ。
そしてそれは、シンジの記憶を呼び起こす鍵。

頭のなかに閉じ込められていた記憶が、一斉に脳内を駆けめぐる。

それこそが、非日常を過ごした彼の記憶

ナカマが、死んだ。

本当だ。

嘘じゃない。

葬儀が行われていた記憶だってある。

葬儀にはぼくたちを含めて大勢の人が来ていた。

所々に顔を見知ったNERVの職員や、黒スーツに身を包んだ諜報部の人もいたが、大半はナカマと同じ中学と思われる人たちで参列の大部分は占められていた。

そんな中でぼくたちも列に並ぶ。

通り過ぎるナカマの骸の乗った車を前に、ぼくはあの日の事を思い出したんだ。

忘れない。

忘れるわけもない。

ほんのわずかな時間の付き合いだったけど、

地球を守った小さな勇者、そして、ぼくらを一つにしてくれた友達が見せた、勇気を

シンジは思わず自分の胸を紙切れごとわしづかみにしていた。

苦しそうにしている。

紙に書かれていた事　つまり鍵　が、彼の辛い記憶の扉を開いたのだらう。

それでも少ししてその手を離し、もう一度例の紙切れに目をやる。忘れてはいけない大切な事、もっと僕は覚えている、とでも言わんばかりに

葬儀が終わって、ぼくたちはジアースのコックピットに集まりだした。

誰かが召集をしたわけでもない。ただ何となく、それだけである。

だけど、その理由は分かりきっている。

みんなと一緒にいることで、今は無き人を思う悲しみを紛らわすためだ。

「……………」

そんな重い空気だからであろうか。

だれもしゃべろうとしない。

目線を合わせようとしてもしない。

沈黙は白い空間の際限の無い広がりを実際立たせて、まるでスカイダイビングのような3次元世界の落下感をぼくに与えるばかりだった。

スカイダイビング、やったこと無いけど……

要するに、強烈なめまいに襲われたみたいな感覚だ。

そうこうしているうちに、結局全員が集合してしまった。

どうせならいっぺんに呼んでほしいね、などとカヲルが軽い口調で文句を垂れたが、なおも重い雰囲気である。

この場にいる人たちはまるで人形だ。

本当に、一言も発しない。

あのいつも元気なアスカですら椅子に座ってうなだれている。

ぼくももう限界だ。

重い空気に耐えかねて顔を両手で覆い、伏せようとした時だった。

「みんな、聞いて。」

突然、綾波が口を開いた。

か弱い声だったけれど、それでも静寂に包まれた空間には十分すぎるくらいに、その訴えは響き渡った。

その直後、みんなの尖った視線が一斉に綾波へと襲い掛かる。ぼくも反射的に視線をそちらにやる。

それでも彼女は動じずに、続けた。

「みんな、聞いてほしいの」

「

人のせいにしない

自暴自棄にならない

泣いて過ごさない

とても簡素で、それでいてぼくたちに足りないもの全てを捉えたか

のような一言、と説明したら良いだろうか。

綾波の口から紡がれたのは、そんな一言だった。

辛かった。

自分の弱さを素直に認めるのは。

それでも、

ぼくたちは、それを大きく飲み込んで、心の内にしまった

シンジは紙を折り畳み、机にそっと置く。

すべてを思い出した。

そうだ、ぼくは彼らの、彼女たちのためにも、強く生きなくてはいけないんだ。

その意志を今一度確かめる。

.....

ごめんなさい、ちょっと無理かもです。

さっきまで長ったらしく過去話を回想してたのも心を落ち着かせるための時間稼ぎです、すいません。

だってミサトさんに呼ばれて遅くに家に帰ったらこの状況ですよ??？
パニックにならないほうがおかしいですよ。

ってか僕はなんでこういう状態にいつつもなるんですか??

ぼくにはこの状況からの逆転ホームランなんて無理なんですから。

とか言ってるうちに、ほら、蒼髪紅目の美少女が一糸纏わぬ格好で
ぼくに近づいてきますし…!!

確かにぼくが何も知らないままにいきなり脱衣場のドアを開けたの
がいけないのは分かってますよ!?

でも自分の家の脱衣場の中に人がいるって事まで推測できる人なんて
いますか??

……とか言ってる場合じゃなくて!!

どうする!??どうする!!?どう……

パシッ!!

嗚呼、綾波の冷ややかな微笑みが見える……

この後、逃げるように居間へ駆け込むと、机の上に黒魔法をかけたかのようなドス黒いオーラを放つ紙切れを目にした。

おそろおそろ手にとって……
ぼくは絶句した。

『レイのマンションの復旧工事が終わるまで、レイをよろしくね

by ミサト』

勘弁してくださいよ……

■■■■

ということで生活雑貨を買い集めるために、シンジとレイは商店街へと繰り出していた。

フツーなら女の子と二人で買い物なんて、健全な男子なら心踊るシチュエーションなのだろうが……

「碓くんのエッチ。」

「ヴッ……!!」

今のぼくには理解できない……

「……ゴメン。」

まあ、言われても仕方がないだろう。

本当は自分に悪意はなかったと伝えたいところだったが、
むしろこの状況で弁明しても逆効果だと思つので、ここは黙ってお
くのが得策か。

それにしても……

「シンジくんも大胆なコトするようになったね。
驚いたよ。」

うるさいなあ。

ってゆーかなんでここに渚カヲルがいるんだ!?

「そりゃあ、ぼくはどこにでも移動できるからね。」

と、カヲル。

って勝手に人の心を読むなよ。

「……ところで、渚君はいつからいたの??」

「とりあえず2人が玄関から出たときにはもういたけど？」

あ、それと……カヲルでイイよ、シンジ君。

むしろそついう風に呼んでほしいな、ぼくは。」

そう言つてカヲルは照れくさそうに、こまったように笑う。

そんな様子を見て、あわててシンジもぎこちない笑顔で返した。

「わ、分かったよ、カヲル君……。」

「ありがとう!」

横には爽やかに微笑む顔。

その爽やかフェイスは、女性はもちろんのこと、男性ですら一瞬見とれてしまうような表情であつて……

いかん、一瞬顔が熱くなつてしまった。

おっと、イケナイイケナイ。

てか、やけにニツコニコだね……

「それよりさ、

僕たちどこかで会つたことがあるの、覚えてない??」

「え、あ……そうだったっけ?？」

「うん。」

思い出せない。

小さい頃の話だろうか？

「…ゴメン、覚えてないや。」

瞬間、カヲルの笑みはシンジへの疑問
げな表情に変わった。

本当に??.?でも言いた

だけど、本当に知らない。

シンジは首を横に振った。

「そうか…、それもそうだよね。
ゴメンね、シンジ君。」

「いいよ。」

「こつちこそ、ゴメン。」

カヲルは突然に足を止めて「じゃあね」と言っ、どろぞろの空間へ
と帰っていった。

「不思議な人だね、あの人。」

隣で2人のやりとりを聞いていたレイが呟く。

「確かに、不思議な人だよ。」

シンジは生返事で返した。

「最初、臨海学校で会った時も変な人って思った。でも、悪い人って感じはしなかったかな？」

「ぼくもそう思う。」

いい人だとは思っただけど、何か違和感を感じる。

今さっきの「ぼくたちは出会った事がある」発言だったり、最初に会った時だってなぜか第一中学校の制服を着ていたり、疑問や違和感が頭から離れない。

もしかして……

「もしかしたら古泉君みたいな超能力少年だったりして。」

「……コイズミ??」

でも、渚君はどこにでも瞬間移動できてたから、超能力少年なんじゃない……。」

「あっ、そうだよな。」

「ははッ、はは……。」

＝
＝
＝

「　　そうですか、終わりましたか。」

カヲルは一人ジアースのコックピットで、ジアース調査の終了の連絡を冬月から受けていた。

「それで、どうですか??」

己の無力さでも思い知っていただけましたか??　　そうですか。

では回収させていただきますので、近辺の船舶の退避をお願いします。」

電話を切る。

静寂。

そしてカヲルは環形に並んだ椅子の一つ　　ワクの椅子　　にゆっくりと腰掛けた。

仰角45度でコックピットの天井を仰ぎ、銀髪が美しく流れる。

目を覆い隠していた前髪が取り払われて現わになる甘いマスク。

その表情はシンジと同年代とは思えないくらいの落ち着きと、分不相応な物悲しさを醸し出していて……

「もう失敗はしない。

今度こそキミだけを幸せにするよ、シンジ君。」

揺るぐことなき真つ直ぐな瞳がそこにはあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0261i/>

ぼくらのエヴァンゲリオン

2010年10月8日13時28分発行